

袋井駅前第二区画整理事業に伴う
第95～106次発掘調査報告書

掛之上遺跡

2015

静岡県袋井市都市建設部都市計画課
静岡県袋井市教育委員会

掛 之 上 遺 跡

2015

静岡県袋井市都市建設部都市計画課
静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成23～25年度にわたって行われた掛之上遺跡の第95～106次調査の報告書である。
2. 調査は、袋井駅前第二区画整理事業に伴って袋井市都市建設部都市計画課から依頼を受け、袋井市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は袋井市高尾地内で、袋井駅前第二区画整理事業用地を対象として実施し、その面積は第95次調査166.8㎡、第96次調査94.5㎡、第97次調査146.6㎡、第98次調査293.6㎡、第99次調査251.6㎡、第100次調査387.0㎡、第101次調査180.0㎡、第102次調査253.1㎡、第103次調査344.5㎡、第104次調査81.9㎡、第105次調査229.2㎡、第106次調査515.0㎡である。
4. 発掘調査期間及び整理作業期間は下記のとおりである。

発掘調査	(第 95 次現地調査)	平成 23 年 5 月16日	～ 平成 23 年 6 月29日
	(第 96 次現地調査)	平成 23 年 5 月16日	～ 平成 23 年 6 月29日
	(第 97 次現地調査)	平成 23 年 7 月 4 日	～ 平成 23 年10月 5 日
	(第 98 次現地調査)	平成 23 年 8 月 1 日	～ 平成 23 年 9 月 9 日
	(第 99 次現地調査)	平成 23 年10月12日	～ 平成 23 年11月18日
	(第100 次現地調査)	平成 23 年11月21日	～ 平成 24 年 2 月20日
	(第101 次現地調査)	平成 23 年12月16日	～ 平成 24 年 1 月24日
	(第102 次現地調査)	平成 24 年 4 月19日	～ 平成 24 年 6 月 8 日
	(第103 次現地調査)	平成 24 年 6 月 4 日	～ 平成 24 年 9 月 6 日
	(第104 次現地調査)	平成 24 年 6 月29日	～ 平成 24 年 7 月27日
	(第105 次現地調査)	平成 24 年 8 月 7 日	～ 平成 24 年10月26日
資料整理	(第106 次現地調査)	平成 25 年 6 月10日	～ 平成 25 年 8 月21日
		平成 23 年 5 月11日	～ 平成 24 年 3 月23日
		平成 24 年 4 月24日	～ 平成 25 年 3 月25日
		平成 25 年 4 月22日	～ 平成 26 年 3 月25日
		平成 26 年 4 月17日	～ 平成 20 年 3 月21日

5. 発掘調査は袋井市教育委員会生涯学習課の水野雅彦が調査担当した。
6. 発掘調査および本書の刊行に係わる事務は袋井市都市建設部都市計画課区画整理係が担当した。
7. 調査体制

発掘調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長	鈴 木 典 夫
教 育 部 長	西 尾 秀 樹
生涯学習課長	早 川 俊 之
生涯学習課主幹 兼文化財係長	永 井 義 博
主任主査	水 野 雅 彦 (担当者)
臨時職員	鈴 木 寿 美子

8. 本書の編集及び執筆は水野が行った。なお、遺構の説明については、調査番号順の記述ではなく、調査区が隣り合い、近接する調査区はまとめて報告することとする。
9. 本書で用いた調査区全景は株式会社フジヤマにより撮影されたもので、遺構・遺物出土状況写真は水野が撮影したものである。
10. 本書に使用した遺構の実測図は、株式会社フジヤマが行った写測図を使用したものである。また、上層断面図や遺物出土詳細図等については水野が作成した。
11. 発掘調査によって出土した遺物、関係資料・記録はすべて袋井市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査・遺物整理従事者
荒井邦夫、高橋秋義、高橋巳代子、田中利志江、田中信行(故人)、ダリウス・C・グレニジ、富樫孝松、中村勇男、萩田横治、前嶋とし、山本泰郎、山本みち子、雪島和夫、吉野一夫、石倉小百合、大島たまよ、相山仁美、鈴木浩子、鈴木美恵子、戸田尚美、松永門絵、原利秋(順不同・敬称略)

凡 例

1. 挿入中のレベルは海拔、方位・測量図については国土院標真北(世界測地系)を使用している。
2. 本書で用いた色彩に関する用語、記号は新版『標準上色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993)をもとに標記した。
3. 遺構・出土遺物図の縮尺は、図中にスケール等で示した。
4. 遺構番号について
検出した遺構の下記の記号で表されている。
S A = 樫跡、S B = 竪穴住居跡、S D = 溝、S E = 井戸跡、S F = 道路跡、S K = 土坑、
S H = 竪立柱建物跡、S X = その他の遺構、S Z = 方形周溝墓・墳墓
各遺構は、遺跡中央部で南北に建設された(仮)市道掛之上4号線を境に東側と西側ごとに連続した番号を付けている。調査後の整理時点などで、新たに遺構として確認されたものについては、一連の番号が付けられていない場合がある。この場合は一連の番号とは別の番号を付けている。
4. 挿入図中で「S」は礎、「P」は土器、「C」は炭化物を示す。
6. 実測図を掲載した弥生土器・土師器・須恵器等の土器及び土製品・金属製品・石器には、通し番号を付し、文中・遺構図版で共通して用いている。
7. 実測図を掲載した土師器及び須恵器の甕について、把手の断面形状から上面が凹むものをA類、平らなものがB類、丸いものをC類と分類した。

目 次

第1章 遺跡の概要	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 基本土層	5
第4節 調査に至る経緯	6
第2章 主な遺構と出土遺物	11
第1節 遺 構	11
1. 第95・99・103次調査区	11
2. 第96次調査区	18
3. 第97・101・102・104・105・106次調査区	22
4. 第98次調査区	34
5. 第100次調査区	37
第2節 遺 物	44
1. 95～106次調査区出土遺物	44
第3章 まとめにかえて	66
引用参考文献	71
写真図版	

挿絵目次

第1図 調査地位図	2	第31図 第100次調査区SB45・46・47・48 実測図	39
第2図 周辺遺跡分布図	3	第32図 第100次調査区SB49・50 S132 実測図	40
第3図 土層堆積状況説明図	5	第33図 第100次調査区SH12・50・51 実測図	41
第4図 調査区位置図	8	第34図 第100次調査区SZ46 SX 1 実測図	42
第5図 第95・99・103次調査区全体図	11	第35図 第100次調査区SZ25・27 実測図	43
第6図 第95・99・103次調査区SB15・16・17 実測図	13	第36図 第95・99・103次調査区出土遺物実測図 1	46
第7図 第95・99・103次調査区SB11・12・14・18 実測図	14	第37図 第95・99・103次調査区出土遺物実測図 2	47
第8図 第95・99・103次調査区SB18・19 実測図	15	第38図 第95・99・103次調査区出土遺物実測図 3	48
第9図 第95・99・103次調査区SZ 6・13・14 実測図	16	第39図 第96次調査区出土遺物実測図 1	49
第10図 第95・99・103次調査区SZ16・17・18 実測図	17	第40図 第96次調査区出土遺物実測図 2	50
第11図 第96次調査区全体図	18	第41図 第96次調査区出土遺物実測図 3	51
第12図 第96次調査区SB17a・17b・17c・35 実測図	19	第42図 第97・101・102・104・105・106次調査区出土遺物実測図 1	52
第13図 第96次調査区SZ57a・57b SZ15 実測図	20	第43図 第97・101・102・104・105・106次調査区出土遺物実測図 2	53
第14図 第96次調査区SZ 7・16 SK66 実測図	21	第44図 第97・101・102・104・105・106次調査区出土遺物実測図 3	54
第15図 第97・101・102・104・105・106次調査区全体図	22	第45図 第97・101・102・104・105・106次調査区出土遺物実測図 4	55
第16図 第97・101・102・104・105・106次調査区SB55・56・57 実測図	24	第46図 第97・101・102・104・105・106次調査区出土遺物実測図 5	56
第17図 第97・101・102・104・105・106次調査区SB52・54・60・61 実測図	25	第47図 第98次調査区出土遺物実測図 1	57
第18図 第97・101・102・104・105・106次調査区SB36・37・53 実測図	26	第48図 第98次調査区出土遺物実測図 2	58
第19図 第97・101・102・104・105・106次調査区SB4a・24b・58・59 実測図	27	第49図 第98次調査区出土遺物実測図 3	59
第20図 第97・101・102・104・105・106次調査区SB51 SB49 実測図	28	第50図 第98次調査区出土遺物実測図 4	60
第21図 第97・101・102・104・105・106次調査区S11 8・9・48 実測図	29	第51図 第100次調査区出土遺物実測図 1	61
第22図 第97・101・102・104・105・106次調査区SZ17・19 実測図	30	第52図 第100次調査区出土遺物実測図 2	62
第23図 第97・101・102・104・105・106次調査区SZ18・50・21 実測図	31	第53図 第100次調査区出土遺物実測図 3	63
第24図 第97・101・102・104・105・106次調査区SZ28・29 実測図	32	第54図 第100次調査区出土遺物実測図 4	64
第25図 第97・101・102・104・105・106次調査区SX 1・2・3 実測図	33	第55図 第100次調査区出土遺物実測図 5	65
第26図 第98次調査区全体図	34	第56図 区画整理事業実施前の地積図及び字名	70
第27図 第98次調査区SB38・39・40 SZ24 実測図	35	第57図 掘之上遺跡時代別(古墳)分布図	72
第28図 第98次調査区SZ 8・23 実測図	36	第58図 掘之上遺跡時代別(古墳)分布図	73
第29図 第100次調査区全体図	37	第59図 掘之上遺跡時代別(古代)分布図	74
第30図 第100次調査区SB41・42・43・44 実測図	38	第60図 掘之上遺跡時代別(中世・近代)分布図	75

写真図版目次

写真図版1 掘之上遺跡発掘調査区北西側全景(合成写真)	写真図版16 第100次調査区遺構 2
写真図版2 掘之上遺跡発掘調査区南西側全景(合成写真)	写真図版17 第101次調査区全景
写真図版3 掘之上遺跡発掘調査区東側全景(合成写真)	写真図版18 第101次調査区遺構
写真図版4 第95次調査区全景	写真図版19 第102次調査区全景
写真図版5 第95次調査区遺構	写真図版20 第102次調査区遺構 1
写真図版6 第96次調査区全景	写真図版21 第102次調査区遺構 2
写真図版7 第96次調査区遺構	写真図版22 第103次調査区全景
写真図版8 第97次調査区全景	写真図版23 第103次調査区遺構
写真図版9 第97次調査区遺構	写真図版24 第104次調査区全景
写真図版10 第98次調査区全景	写真図版25 第104次調査区遺構
写真図版11 第98次調査区遺構	写真図版26 第105次調査区全景
写真図版12 第99次調査区全景	写真図版27 第105次調査区遺構
写真図版13 第99次調査区遺構	第106次調査区全景
写真図版14 第100次調査区全景	写真図版28 第106次調査区遺構
写真図版15 第100次調査区遺構 1	写真図版29 第106次調査区遺構

第1章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

袋井市は静岡県西部に位置し、遠州灘に臨んでいる。南北に長い市域の北東から西側にかけて斜めに太田川が南流し、中央部には掛川市より西流してきた原野谷川が大きくその流れを南に向け、太田川と合流し太平洋へ注いでいる。その原野谷川が流れを南側へ変える地点北側には旧東海道の宿場町として発展した袋井地区、そして南側にはJR東海道線袋井駅を中心に栄えた高尾地区が位置している。太田川、原野谷川の両岸に広がる沖積地は袋井市北部、中央部の穀倉地帯となっている。市南部の東側には小笠山丘陵が位置し、市域に含まれる西山麓は小笠沢川や弁財天川、三沢川などの小河川によりやや大きな谷が形成され、縄文時代の集落遺跡である長者平遺跡や大畑遺跡が確認されている。尾根の支稜部はさらに細かく開析され、浅く短い支谷と尾根が複雑に入り組んだ地形を呈している。

袋井市の中央部、袋井市高尾字掛之上、大門に広がる掛之上遺跡は、小笠山西北山麓で原野谷川左岸の標高18mを測る段丘上にある。現在のJR袋井駅東側で鉄道によって段丘は南北に分断されているが、明治21年に開通した東海道鉄道（現：東海道本線）建設のために掘削されたものである。現在では便宜的に北側の遺跡を掛之上遺跡、南側の遺跡を大門遺跡と呼称しているが、本来同一の遺跡だった可能性は高いと考えられる。

第2節 歴史的環境

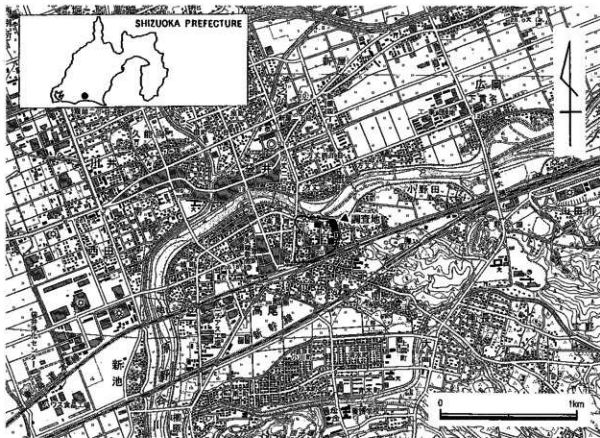
これまでの調査により、掛之上遺跡での人々が住み始めた時期は、遺構として認定できるものは無いが、縄文時代中期の土器片（人畑C式段階、里木Ⅱ式）や打製石斧、石鏃、黒曜石の剥片が少量出土することから、本遺跡から南東約2kmに縄文時代中期の集落遺跡である長者平遺跡が所在するので、その集落の分村として小集落が段丘上に営まれた可能性がある。

これまでの調査により、掛之上・大門遺跡において弥生時代中期から後期の遺構数が増えることから、この段丘上には鶴松・徳光遺跡や坂尻遺跡に次ぐ規模の集落が営まれたと見られる。その検出遺構から掛之上遺跡を墓域として大門遺跡が居住域となった時期が見られる。中期まで掛之上・大門遺跡の墓域と考えられている団子塚遺跡に中期の墓域と重複して後期の集落が出現し、中期の段階で墓域ではなかった北原遺跡にも集落が営まれようになるため、団子塚・北原遺跡の墓域は、居住域からやや離れた高尾山Ⅱ遺跡の方形周溝墓群と考え、この時点で拠点集落であった掛之上・大門遺跡から団子塚・北原遺跡が分村したことによって現れたものと考えられる。このような集落の拡大、分村という動きは、太田川水系では下流域の低地における十二所遺跡群や鶴松遺跡群の成立と発展、掛川市の和田岡丘陵遺跡群に見られる後期に集落が丘陵部へ進出する動きと同一の現象と考えることができる。袋井市周辺では河川規模が小さいことから、形成される沖積平野が狭く、平野部の自然堤防等の微高地の発達が顕著ではなく、掛之上・大門遺跡や愛野山遺跡のような段丘上や低位の丘陵に立地する集落とともに、一色前田遺跡や掛川市八景山遺跡、森町片瀬城遺跡のように環濠をもつ高地性集落・三沢古墳群遺跡や愛野山遺跡のように環濠を持たない高地性集落が現れる。しかし、西遠江の後期集落のほとんどが環濠集落であるのに対し、袋井市周辺では、平野部の鶴松・徳光遺跡では環濠らしい溝が見られるが、大多数の集落遺跡では環濠は遭れることなく対照的である。

弥生時代後期に比べ、古墳時代前期には遺構・遺物が減少することから、掛之上・大門遺跡の集落は一時的に衰退したと見られる。その後、再び遺構・遺物の検出・出土量が増すのは古墳時代後期になってからで、掛之上遺跡側では6世紀代の遺構が調査区全域から確認されている。特に大門大塚古

墳と同時期と見られる櫓列に囲まれた豪族居館状の居住区も確認された。6世紀後半になると、総数100基を数える長谷平古墳群や地蔵ヶ谷横穴群、金山横穴群等が近隣地に現れることから、掛之上・大門遺跡がその造営者集団の拠点集落であったと考えることができる。また、尾根を一つ隔てた約4Km南東には、大門大塚古墳へ須恵器を供給した中遠地方最古の須恵器・埴輪窯の一つ、衛門坂占窯が営まれた。

奈良時代に入ると、掛之上遺跡中央部（第5・6・8次調査区）から地方官衙の正倉と見られ、口字型に配置された大型掘立柱建物群、その西側の政庁区と見られる場所から長殿風建物等、それらを区画する幅4mの溝が検出された。また、大門遺跡においても総柱掘立柱建物が確認されているので、掛之上・大門遺跡の立地から見て都衙である可能性が高い。しかし、同時期の山上遺物が少なく、また、文字資料の出土がないため、具体的な役所名は明確に成っていない。市内の坂尻遺跡と春岡・稲荷領家遺跡が郡衙関連遺跡として知られ、坂尻遺跡は市の西部、原野谷川西岸の自然堤防上に立地し、これまでの調査により、櫓列に囲まれた掘立柱建物やかまどを伴わない竪穴住居が発見され、出土した墨書土器から佐野郡衙の厨家、駅家と推定され、駄馬の道（東海道）沿いの施設としてとらえることができる。春岡・稲荷領家遺跡は市の北部、太田川の自然堤防上に立地している。春岡遺跡からは大型の掘立柱建物や区画溝とともに墨書土器や木簡、帯金具、緑釉陶器、硯等が出土している。また、稲荷領家遺跡からも門面硯や木簡（現在所在不明）が発見され、かねてより山名郡衙と推定し、伝馬の道（東海道）沿いの施設としてとらえることができる。それら3遺跡の立地や東海道の推定ルートを考慮すると、坂尻遺跡は佐野（佐益）郡家、春岡・稲荷領家遺跡は周智郡家、掛之上・大門遺跡は山名郡家と想定することもできると思われる。郡衙推定遺跡以外にも川田藤藏淵遺跡では糸里水田が検出された。土橋遺跡では「国厨」、市南部の新堀遺跡からは「山名厨」の墨書土器



第1図 調査地位図



第2図 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|
| 1 桜之上遺跡 | 17 大門田遺跡 | 33 高尾向山古墳群 | 49 平楽遺跡 |
| 2 狐塚古墳 | 18 金山横穴群 | 34 高尾向山Ⅰ遺跡 | 50 浅間神社古墳 |
| 3 方丈遺跡 | 19 金山遺跡 | 35 雲座古墳群 | 51 膳井十二所遺跡 |
| 4 小野田遺跡 | 20 金山古墳群 | 36 室野金山遺跡 | 52 膳井十二所居館跡 |
| 5 能光寺古墳 | 21 愛野向山Ⅱ遺跡 | 37 室野金山古墳群 | 53 弘法堂古墳 |
| 6 大門遺跡 | 22 愛野向山横穴群 | 38 長者平遺跡 | 54 貴名地遺跡 |
| 7 大門大塚古墳 | 23 愛野向山古墳群 | 39 長者平古墳群 | 55 五ヶ山古墳群 |
| 8 地蔵ヶ谷遺跡 | 24 袋井街遺跡 | 40 北山遺跡 | 56 古新田遺跡 |
| 9 地蔵ヶ谷横穴群 | 25 三門遺跡 | 41 北山古墳群 | 57 高道遺跡 |
| 10 地蔵ヶ谷古墳群 | 26 御所森古墳 | 42 北原遺跡 | 58 浅羽氏館跡 |
| 11 井守塚古墳群 | 27 関口遺跡 | 43 王子遺跡 | 59 膳井新屋遺跡 |
| 12 大門山古墳群 | 28 加賀爪氏館 | 44 王子古墳群 | 60 原添遺跡 |
| 13 浅原神社上古墳群 | 29 音堀古墳群 | 45 山根遺跡 | 61 馬伏塚城跡 |
| 14 雲下遺跡 | 30 高尾向山Ⅱ遺跡 | 46 山根古墳群 | 62 藥業院遺跡 |
| 15 雲下横穴群 | 31 園子塚古墳群 | 47 貴名地古墳群 | |
| 16 丸尾氏館 | 32 園子塚遺跡 | 48 平楽陣屋跡 | |

が発見され、郷クラスの官衙に郡衙や国府の厨家に関係する施設が存在した可能性を示している。このように公的施設はあるていど推定可能であるが、令制施行後の都城は江戸期や明治期以降の郡域とは大きく違いを見せ、推定すら困難な状況にある。おおよそ山梨以北が周智郡、山梨以南で原野谷川以北が佐益郡・山名郡と見られ、市南部については『和名類聚抄』に「幅多(判多)郷」「貴名(奴木名)郷」が見られることから、現在の浜松市南東部から続く広大な長田郡(和銅二(709)年以降に分割され長下郡)に含まれていたと推定する見解も見られるため、郡域の特定の難しさが見られる。

東側の谷には天慶2年(878)に従五位下を拝領した記録のある赤尾洪垂神の祭祀から始まったと見られる真言宗の赤尾山長楽寺址(堂下遺跡)が位置する。また、小笠沢川の上流には行基開山を伝え、白山信仰の拠点地として成立したと見られる真言宗の古刹、法多山尊永寺や明治24年(1891)に麟鳳八葉鏡を出土した長者屋敷廃寺があり、尊永寺は今に法灯を伝えている。

古代末以降の当地域での動向を調査された遺跡からみると、土橋遺跡では古代から中世の生活面は後世の削平により、建物の痕跡は確認できなかったが、13世紀後半と考えられる1辺約30mの方形を呈する区画溝や井戸、土坑等を検出した。坂尻遺跡では12世紀前期から中期では小溝によって区画され東西に短冊状の屋敷地が5箇所確認された。それぞれの屋敷地は主屋と見られる大型掘立柱建物1～2棟に対して、1～3棟の付属の掘立柱建物で構成される。12世紀後期には区画溝によって方形に区画された祭祀空間(神社?)の場が登場し、13世紀前期を迎えると遺構は江戸期の東海道の近くに集中し、主屋と見られ屋内に井戸を持つ底付大型掘立柱建物1棟の周囲に4～5棟の付属屋、屋外井戸等を組み合わせとする屋敷地を3区画検出している。

坂尻遺跡から見て原野谷川と逆川は喜んで南側の祢宜弥遺跡では、逆川によって削られているため全容は不明だが掘立柱建物を主屋とする屋敷が検出されている。小笠山西側の諸井では、原野谷川東岸の自然堤防上に100×80m規模を測る方形区画溝と土塁に囲まれた居館址である十二所遺跡が13世紀後半に成立する。出土遺物などから12世紀代から地域の有力者の屋敷地が営まれ、13世紀後半に区画溝と土塁を持つ居館が成立し、14世紀後半～15世紀前半に断絶する。15世紀後半～16世紀代に再び居館として整備される。駿河伊達氏も一時期居館の主となったことが古記録に見え、現在居館址に建つ心宗院という寺院名は、居館の最後の主の戒名であった可能性がある。さらに南部では、新堀遺跡においては、鎌倉時代前半期に属する南北50m、東西30mに区画された屋敷地が検出された。区画内の6棟の建物は規則的に配置はなされておらず、主屋のような大型建物は建てられることなく、その出遺物から日常の食料を扱う施設が祭祀にかかわる施設と推定している。また、馬場第1・第2遺跡では12世紀前半期以前の上坑や中期以降の掘立柱建物、後半期以降の遺構とともに13～14世紀の溝状遺構や井戸状遺構が検出されている。

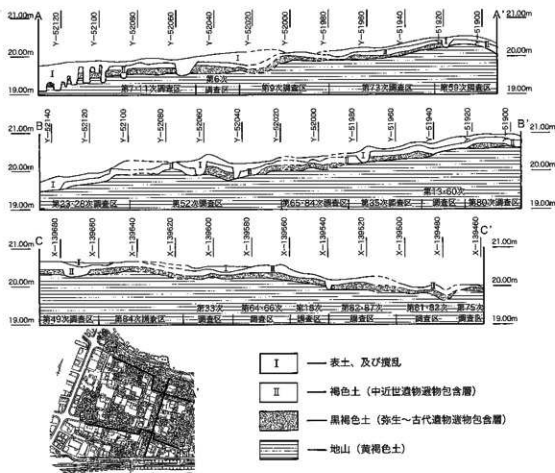
これらの遺跡は、平安時代から鎌倉時代まで存続する馬場第1・第2、坂尻遺跡と鎌倉時代になってから営まれたと見られる土橋遺跡に分けられ、その検出状況を見ると、多くの平安時代の集落は数棟の掘立柱建物と井戸、土坑、排水・灌漑溝等からなる散村的な村落であったことを想像させる。坂尻集落は13世紀前半から衰退をはじめ、14世紀には掛川市の原川遺跡へ集落の主体が移る。一方、13世紀前半代に区画溝(堀)を巡らした土橋遺跡の集落や祢宜弥遺跡はその後も存続し続けることから、畿内周辺の地域では、11世紀代にはすでに古代的な村落形態から中世的な屋敷地へ変化が見られるようであり、当地域での中世化は新堀遺跡等から見て12世紀より始まり、地盤が安定している袋井市中央部以北と南部低地では若干の時期差を見せながらも中世化が進み、土橋や坂尻の集落へと変化し、その後、中世後期の戦国の村へと発展するものと思われる。

第3節 基本土層

掛之上遺跡におけるこれまでの調査により確認された基本土層は次のとおりである。当地は早い段階から住宅街化したため多くの場所で削平を受け、遺物包含層の残りは悪い。

- | | |
|-----------|-----------------|
| I層：褐色土 | 表土（現代～中世の遺物包含層） |
| II層：黒褐色土 | 弥生～古墳時代の遺物包含層 |
| III層：黄褐色土 | 粘土質地山 |
| IV層：黄褐色土 | 砂礫混入層 |

鉄道南側の大門遺跡でも早い段階から住宅街化したため安定した堆積状況を確認できる場所は少なく、多くの場所で削平を受け、遺物包含層の残りは悪い。大門大塚古墳の調査区では、古墳下から古墳時代の旧表土である黒色土が検出され、また、中世の遺構の覆土は古墳時代より黒味が強いので、それらを加味すると、大門I層（褐色土：表土）、大門II層（黒色土：中世の遺物の包含層。大門III層より黒色の色調が強い層）、大門III層（黒色土：古墳時代の遺物包含層）、大門IV層（黒褐色土：弥生時代の遺物包含層）、大門V層（赤黄色土：無遺物層。段丘形成の礫層上面の礫混じりの酸化粘土層）、大門VI層（砂礫層：段丘基盤層）となり、同一成因の段丘に立地する長者平遺跡の層位を参考にするに大門IV層と大門V層の間に縄文時代の遺物包含層である暗褐色土が入る可能性がある。掛之上遺跡と対比すると、掛之上I層は大門I層及びII層、掛之上II層は大門III層及びIV層となり、掛之上III層は大門V層、掛之上IV層は大門VI層となる。やはり宅地化による削平が大きいことわかる。また、掛之上遺跡南西に位置する天理教山名大教会や袋井駅敷地そのものの敷地造成のために、掛之上地区の小高い場所を削り土砂を移したとの話が地元に残されている。



第3図 土層堆積状況説明図

第4節 調査に至る経緯

袋井市高尾地内に所在する遺跡の存在はかなり古くから知られていたようで、東海道本線北側を掛之上遺跡、南側を大門遺跡と呼称している。昭和5年(1930)発行の「静岡県史」には簡単な記述が見られる。昭和37年(1962)に始まる東海道新幹線の建設に伴い、本格的な調査が鉄道南側の大門遺跡から始められ、同57年、58年、62年と四次にわたる調査が実施されました。鉄道北側で原野谷川に挟まれた場所にある掛之上遺跡では、区画整理事業などの事前調査として、昭和46年から調査が始められ、これまでの発掘調査で掛之上及び大門遺跡は一連の遺跡であることが判明している。また、大門遺跡は以前、JR東海道本線近くの累徳寺付近を大門Ⅱ遺跡、袋井市立中央・南公民館付近を大門Ⅰ遺跡と呼称してきた。個人住宅の建て替えなどに対応して行われた試掘確認調査の結果、同一遺跡である結果を得たことによって、平成18年2月27日付け袋井市第270号にて静岡県教育委員会に協議し、平成18年3月13日付け教文第2062号により範囲変更の通知が出された。

大門遺跡の第1次調査では、遺跡範囲の南端付近の南向き斜面に調査区が設定された。遺構の検出は無く、弥生時代中期～後期、古墳時代前期、奈良時代の土器が出土したのみであった。第2次調査から第5次調査では、遺跡の中央部に調査区が設定され、弥生時代の竪穴住居3基、掘立柱建物8棟、方形周溝墓1基、土坑及び竪穴状遺構などが検出されている。調査区北西から検出された奈良時代と見られる2棟の大型で総柱の掘立柱建物は、掛之上遺跡側に正倉域と政庁域が確認された郡衙に伴う雑倉と想定することができる。また、第5次調査で検出された13世紀代と見られる主屋1棟(SB2)、納屋・作業小屋(SB1・SB3)、井戸が検出された。また、近接して総柱の高床倉庫(SB4)等も検出されたが、調査担当者はSB1～3という構成の屋敷は、その規模から見て上橋遺跡や木越遺跡(磐田市)に見られる周囲を堀りによって区画された屋敷地を持つような支配者層(武士)の人物の住居ではなく農民層の住居と見られ、総柱の高床倉庫(SB4)等はSB1～3の居住者の支配層(武士)管理のものと考察している。同時期(鎌倉時代)の記録は見られないので具体的な支配者(武士)の名は上げることができないが、応永3年(1396)6月15日の今川了俊(貞世)遊行状に見られる「高部郷内大塚田畠」の耕作者の姿を彷彿とさせる。この13世紀には掛之上・大門遺跡の原野谷川北側の袋井宿が初めて記録に現れたことでも知られ、鎌倉幕府の交通対策が無策のうちに瓦解した後には長者(地域集団の長)によって率いられた自主的な営業団体によって宿場が運営されはじめ、地域の経済の中心や交通の要衝に宿場が開かれている。具体的に袋井宿の開宿状況を示すものがないのははっきりしないが、SB1を含め当地に暮らす人々の支配者層が関わったことは明らかである。

大門大塚古墳については、『遠江国風土記伝』や『遠江古跡図絵』に「高部の石棺」として記され、後醍醐天皇の皇子の墓として古くから知られてきた高塚である。調査の開始は古く、明治16年(1883)に行われた記録が坪井正五郎によって明治20年(1887)に発表されている。この発掘は学術調査ではなく、明治政府の陵墓確定政策と深く関わった政治的なものであった。その後、昭和50年代の後半、古墳の保存整備に向けた内・外施設の構造把握のため第2次調査が実施された。調査区からは弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の河原石積の横穴式石室と墳丘、古墳の周溝が検出された。墳丘は古墳時代の旧地表面における直径は約26m、高さ4mを測る円墳で、埴輪列・葺石などの墳丘外部施設は一切検出されていない。主体部は南東方向に開口する円礫小口積の竪穴式横穴式の横穴式石室と推定される。弥生土器や須恵器とともに金属製馬具、刀剣類、トンボ玉が出土し、それらから古墳は6世紀前半を大きく遡らない時期の築造で、得意な形態の石室を持ち、金銅製の馬具、銅鏡などを持つ首長墓であることが判明している。

掛之上遺跡については、昭和49年に実施された孤塚古墳周辺での発掘調査を第1次調査として始まり、その後、昭和57年（1982）に個人住宅建築の事前調査として中部電力（株）袋井変電所（以下「掛之上変電所」と呼称）の南側で第2次調査、昭和63年（1988）に袋井駅前土地区画整理事業に伴う道路建設の事前調査（第3次調査）と続いた。（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所（当時）が平成9年に原野谷川護岸改修事業に伴う発掘調査を第4次調査とした。

袋井駅前第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査については、平成9年に平面調査を実施するにあたり、事業予定地内を対象にして試掘調査（担当：永井義博）を実施し、その依存状況と範囲について確認を行った。その結果、区画整理事業予定地には、ほぼ全域に掛之上遺跡が広がっていることが確認された。その取り扱いについて区画整理担当部局と協議がもたれ、平成11年5月6日付けで文化庁長官充てに文化財保護法関係の手続きを行い、平成11年6月8日付け教文第2-51号により静岡県教育委員会より発掘調査の実施について通知をもって、発掘調査が開始された。

平成11年度に遠州中央農業協同組合袋井南支所（以下「JA袋井南支店」と呼称）の移転に伴う建物建設予定地と地下埋設施設工事予定地等に第6・7次調査（担当：永井義博）が行われ、平成12年度はJA袋井南支店の建物追加部分と地下埋設施設工事予定地等に第6・7次調査（担当：松井一明）が行われた。以後、平成22年度までの調査を松井が担当（～第94次調査）する。調査地点は第4図に詳細を記し、年度ごと

第1表 調査履歴

遺 跡 名	調査回	調査期間	調査原因	調査主体・担当	調査概略
大門1遺跡	第1次	昭和37年2月18日 ～ 昭和37年2月27日	遺跡発掘候補地調査事業	静岡県教育委員会 調査者：大谷純仁	遺跡の構造は無く、弥生時代中期～後期、古墳時代前期、奈良時代の土器が出土した。
	第2次	昭和57年11月4日 ～ 昭和57年12月12日	袋井市公民館建設事業	袋井市教育委員会 調査者：寺川潔明 松井一明	弥生時代中期～後期の土器・灰土、弥生時代前期の土器・灰土、古墳時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
	第3次	昭和58年10月28日 ～ 昭和59年3月31日	袋井市公民館建設事業	袋井市教育委員会 調査者：寺川潔明	弥生時代中期～後期の土器・灰土、弥生時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
	第4次	昭和62年10月19日 ～ 昭和62年10月31日	袋井市南側河川防犯工事建設事業	袋井市教育委員会 調査者：松井一明	弥生時代中期～後期の土器・灰土、古墳時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
	第5次	平成6年10月2日 ～ 平成18年5月8日	袋井市保健センター建設事業	袋井市教育委員会 調査者：松井一明	弥生時代後期、古墳時代後期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
大門遺跡	第6次	平成18年5月8日 ～ 平成18年6月9日	区画建設事業	袋井市教育委員会 調査者：山本義孝	古墳時代の土器・灰土及び土坑を検出し、弥生土器が出土。
	第7次	平成19年7月24日 ～ 平成19年10月16日	市道田端川上段建設事業	袋井市教育委員会 調査者：水野雅彦	弥生時代の土器・灰土及び土坑・溝を検出し、弥生土器が出土。
	第8次	平成18年5月1日 ～ 平成22年3月31日	地方道路整備事業	静岡県埋蔵文化財調査研究所 調査者：松々木和也 松井一明	弥生時代の土器・灰土及び土坑・溝を検出し、弥生土器が出土。
	第9次	平成19年11月19日 ～ 平成19年11月22日	個人住宅駐車場建設（駐車場防犯事業）	袋井市教育委員会 調査者：水野雅彦	弥生時代の土器・灰土を検出し、弥生土器が出土。
	第10次	平成20年6月1日 ～ 平成21年3月31日	市道田端川上段建設事業	袋井市教育委員会 調査者：白澤 孝	古墳時代の土器・灰土及び土坑を検出し、弥生土器・土師器等が出土。
大門大塚・古墳	第11次	平成21年8月5日 ～ 平成21年8月15日	個人住宅駐車場建設（駐車場防犯事業）	袋井市教育委員会 調査者：白澤 孝	弥生時代から奈良時代の土器を検出し、弥生土器・土師器等が出土。
	第12次	明治16年3月18日 ～ 明治16年5月9日	城跡確認	山東部宮内府 調査者：松谷新太郎 山本義孝	後醍醐天皇の皇子、妙法院の宮（奈良親王）遷宮確定のため実施。金銅製馬具、鉄製馬具、銅器等が出土。
	第13次	昭和61年10月27日 ～ 昭和62年2月14日	電線通線調査事業	袋井市教育委員会 調査者：寺川大	弥生時代後期の土器・灰土、古墳時代前期の土器・灰土の横穴式石室と墳坑。古墳の墳頂が検出された。
	第14次	昭和49年7月17日 ～ 昭和49年12月17日	袋井駅前土地開発事業	袋井市教育委員会 調査者：大谷純仁 川井正一	弥生時代中期～後期の土器・灰土、弥生時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
	第15次	昭和57年5月1日 ～ 昭和57年5月31日	個人住宅建設（駐車場防犯事業）	袋井市教育委員会 調査者：寺川大 松井一明	弥生時代の土器・灰土、弥生時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
掛之上遺跡	第16次	昭和63年2月29日 ～ 昭和63年3月1日	駅前第一区画整理事業	袋井市教育委員会 調査者：寺川大 松井一明	弥生時代中期～後期の土器・灰土、弥生時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
	第17次	平成9年9月1日 ～ 平成9年10月17日	原野谷川社会福祉施設建設事業	静岡県埋蔵文化財調査研究所 調査者：松井一明	弥生時代後期の土器・灰土、古墳時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
	第18次	平成11年9月15日 ～ 平成22年3月31日	駅前第二区画整理事業	袋井市教育委員会 調査者：松井一明	弥生時代中期～後期の土器・灰土、弥生時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
	第19次	平成22年3月31日	駅前第二区画整理事業	袋井市教育委員会 調査者：松井一明	弥生時代中期～後期の土器・灰土、弥生時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。
	第20次	平成22年3月31日	駅前第二区画整理事業	袋井市教育委員会 調査者：松井一明	弥生時代中期～後期の土器・灰土、弥生時代前期の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土、奈良時代の土器・灰土が出土した。

の調査区は次のとおりである。

平成13年度：第8～12次調査（JA袋井南支店駐車場及び道路、宅地造成地）

平成14年度：第13～20次調査（道路及び宅地造成地）

平成15年度：第21～26次調査（道路及び宅地造成地）

平成16年度：第27～36次調査（寺院境内及び道路、宅地造成地）

平成17年度：第37～48次調査（寺院境内及び道路、宅地造成地）

平成18年度：第49～56次調査（寺院境内及び道路、宅地造成地）

平成19年度：第57～67次調査（道路及び宅地造成地）

平成20年度：第68～79次調査（道路及び宅地造成地）

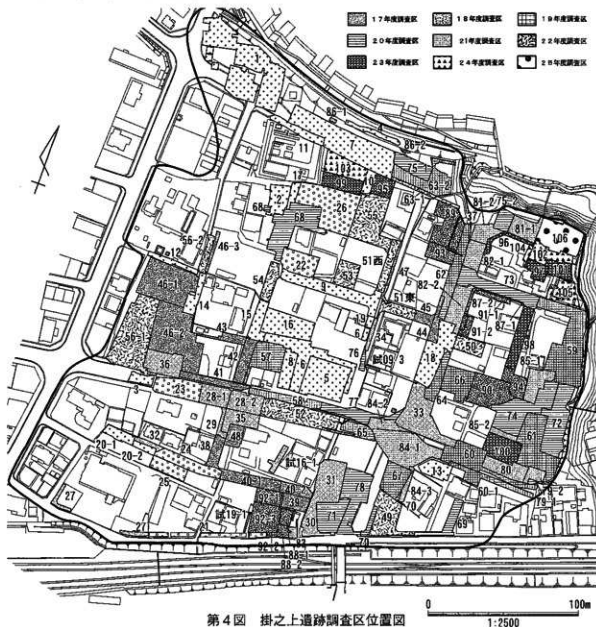
平成21年度：第80～88次調査（道路及び宅地造成地）

平成22年度：第89～94次調査（道路及び宅地造成地）

平成23年度：第95～101次調査（道路及び宅地造成地）

平成24年度：第102～105次調査（道路及び宅地造成地）

平成25年度：第106次調査（道路造成地）



掛之上遺跡は掛之上地区はほぼ全域に広がる遺跡であるため、区画整理事業の進捗に合わせて調査区が設定された。調査時には区画整理のブロック（BL）番号や区画道路〇〇号線地区などと呼ばれていた（例：14BL-3地区）。調査方法は、これまでの調査によって遺跡の埋没深度が判明しているため、調査区の表土を重機により除去し、その後、人力により遺構の検出を行った。住宅街化が早かったため安定した堆積状況を確認出来るところは少なく、遺物包含層の残存状況も悪く、表土直下で遺構確認面となる地点もあった。

第95次調査以降は市単費により実施され、以前のように区画整理事業関係の交付金、補助金対応の調査の実施ではなかった。また、調査区は大きく、掛之上変電所付近及び遺跡の北東周辺、県道袋井小笠線の高尾掛之上交差点東側付近の3箇所となり、第106次調査の現地作業の終了をもって袋井駅前第二区画整理事業に伴う掛之上遺跡の現地調査は終了となった。資料整理については、現地作業と並行して実施された。現地作業では、調査区全体平面図を株式会社フジヤマにより作成されたもので、遺物出土状況及び各遺構の土層断面図は20分の1縮尺で作成した。記録写真はブローニサイズ原画（カラー及び白黒）と35mmサイズ原画（カラー）を使用している。

第95次調査区発掘から第106調査区発掘まで現地調査は3箇年度を要した。各調査区の発掘調査についてはその概要を次に記す。

平成23年4月11日、袋井市都市計画課区画整理係の担当者と調査箇所等の打ち合わせから第95次以降の発掘調査が始まった。5月16日より第95次調査区（12BL-1）及び第96次調査区（14BL-11）の調査を開始し、両調査区の重機により表土除去作業を実施する。5月19日から第95次調査区で人力により遺構確認を始めた。北側の第7次調査区へと南北方向へと伸びる近世の溝4・8とともに、第63・75次調査区へと伸びる溝（SD-7）からは宝篋印塔の笠が上下逆さまにして出土する。6月1日まで方形周溝墓、土坑などの遺構の掘削を行う。6月3日からは第96調査区へ移動し遺構確認、遺構掘削を行う。両調査区とも6月19日から写真撮影のための清掃作業を実施し、6月29日に調査区全景写真撮影となる。第95次調査区では方形周溝墓の他、近世の区画溝、第96次調査区からは方形周溝墓とともに古墳時代の竪穴住居跡とともに多数の土坑、pitが発見された。7月4日から第97調査区（14BL-4）の表土除去作業を行い、その後、人力により遺構確認と遺構掘削を実施するが、地元要望により、第98調査区（区画道路15号線）を先行して実施することとなり、8月1日に表土除去し、翌日から遺構確認を行う。南北に長い調査区を南側から遺構掘削を実施し、方形周溝墓及び古墳時代の竪穴住居跡を検出する。9月6日から清掃作業、9月9日には調査区的全景写真の撮影となる。その後、第97調査区（14BL-4）の遺構掘削作業へ戻り、完掘後に清掃作業を行い、調査区全景の写真撮影を10月5日に行い、翌日、土層断面図を作図した。なお、この調査区北側中央付近で確認された奈良時代の土坑は須恵器の蓋の破片ばかり出土があり、その中の1点が墨書土器（文字不明）であった。第99調査区（11BL-3）は掛之上変電所東側区画で、10月12日に表土除去作業を行い、東側より遺構確認、遺構掘削を行う。調査区南東部分では第26次調査と重複する部分付近で、方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居跡とともに奈良時代の西側に庇が付く掘立柱建物を検出し、土坑や井戸等とともに近世の地境の溝も発見された。11月11日から清掃作業を実施し、11月17日に調査区的全景写真撮影、翌18日に詳細写真の撮影を行う。第100次調査区（16BL-12）は11月21日から表土除去作業となり、周辺への土の流出止めの養生を行った後、人力により遺構確認を行った。この調査区は遺構の重複度合いが強く、弥生時代の竪穴住居跡及び方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居跡が検出された。また、第60次調査区で検出された棟方向を南北とする奈良時代の掘立柱建物跡の北側半分が検出される。12月12日まで遺構掘削を行い、区画整理事業の工程により16日からは第101調査区（14BL-3）の調査

に着手することとなり、平成24年1月10日より調査を開始し、遺構掘削作業を行う。1月19日から清掃作業を実施し、1月24日に調査区的全景写真撮影となる。その後、第100次調査区の清掃作業と並行して第101調査区の土層断面図の作図を行い、2月10日に第100調査区的全景写真撮影、住居跡のカマドの記録を作成し2月20日に終了した。第101調査区では方形周溝墓、古墳時代の掘立柱建物跡の他、区画溝、屋外炉等が検出された。

平成24年度作業は、第97次調査区北側に設定された第102調査区（14BL-4）の表土除去作業を4月19日に行ったことから始まる。この調査区は東西方向に長く中央部で最も標高が高くなる。東側半分では表土直下で地山の礫層となり遺構はこの礫層に掘込まれている。西側半分にはその礫層の上にある褐色土で遺構は検出された。重複が激しく弥生時代の竪穴住居、方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居とともに、奈良時代の竪穴住居が検出され、覆土中から円面硯が上下を逆さまにした状態で出土した。この住居跡は第97次調査区で黒土土器が出土した土坑の北東側に近接している。遺構掘削が終わった5月21日より清掃作業を実施し、6月8日に調査区全景写真撮影、その後、住居跡カマドの記録作を行った。また、第103調査区（11BL-3）は第99次調査区と同じ区画の北側半分で、6月4日に表土除去作業を行い、6月8日から遺構確認を実施する。区画整理事業の進行状況にあわせ、第104調査区（14BL-3.5.7）の調査を並行して実施することとなり、6月29日に表土除去作業を行い、7月2日から遺構確認、遺構掘削となり、7月23日から清掃作業、7月27日に全景写真撮影となった。8月7日からは第105調査区（14BL-3.5.7）の表土除去作業が実施となった。第103区の調査は悪天候に悩まされ、清掃が終わり全景写真が撮影できたのは8月24日となる。その後、住居跡のカマドの記録を作成となり、9月5日に終了する。第103調査区からは弥生墳時代の竪穴住居跡、古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物とともに土坑、pitが検出された。第104調査区は面積が狭いながら南側に調査区外へ広がる竪穴状遺構が確認され、また、調査区東側はコンクリート製排水溝が遺構確認面より深く埋設され、東側の調査区の遺構との連続性の検証を難しくしていた。中央部で西側調査区外へとおよぶ奈良時代の掘立柱建物跡が検出された。また、南側的大型遺構は、近世のため池状のものと判明する。第105調査区は8月24日から遺構確認作業を始める。遺構掘削作業に入るとすぐに調査区中央部で大きな掘乱坑が数カ所確認された。この調査区は表土直下で地山の礫層となり遺構はこの礫層に掘込まれている。方形周溝墓及び古墳時代の掘立柱建物、地境の区画溝等が検出された。

平成25年度作業は、区画整理事業用地北東隅に設定された第106次調査区（区画道路1号線）で、表土除去作業を6月10日、翌11日から遺構確認、7月2日より遺構掘削を実施した。本調査区は地元で陸居跡との伝承がある場所であるが、痕跡は確認できなかった。8月16日までに遺構掘削作業を終わり、清掃作業となった。8月21日に調査区全景の写真撮影を実施、23日までに機材を撤収し総ての現地作業を終了する。この第106調査区からは、弥生時代の竪穴住居跡・方形周溝墓及び古墳時代の竪穴住居跡、近世の地境の溝・土坑とともに地下室状遺構が検出された。

第2章 主な遺構と出土遺物

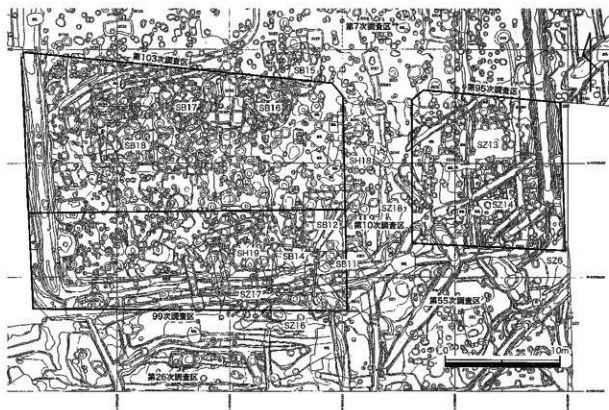
第1節 遺構

1. 第95・99・103次調査区

第95次調査区(12BL-1)は、西側及び北側において第7・10調査が行われており、方形周溝墓及び近世溝の存在が想定されていた。畑地であったため包含層の残りは良いと考えていたが、表土の除去を行った結果、遺構確認面直上まで削平を受けていることが確認された。この調査区では住居は無く、北東方向へと方形周溝墓が列を成して築かれていた。また、南北方向に近世の区画溝が走り、数多くのPitが発見されたが、企画性を見いだすことは出来なかった。多くは弥生土器をその覆土に含んでいたが、時期は判然としない。第99・103次調査区は第10次調査区を挟んで第95次調査区の西側で掛之上変電所に挟まれた区画である。南北に並ぶ第99・103次調査区から弥生時代の竪穴住居跡3棟、方形周溝墓5基、土坑1基、古墳時代の竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、近世の区画溝及び土坑等が発見された。

竪穴住居跡(SB)

弥生時代の竪穴住居は、第103次調査区北側でSB15・16・17の3棟が確認された。ほぼ遠近に近い平面形態を持ち、SB16は中央部、SB17は南西側に炉が確認された。なお、SB15以外は後世の削平により壁溝や掘り込みは残されていない。古墳時代の住居はSB17の西側でSB18、第99次調査区に東南隅付近にSB11・12・14の3棟が確認された。SB11・14はSD 8と重複し残存状態が悪い。また、SB18は弥生時代に属すると考えられる上坑やPitと重複し、住居柱穴覆土にも弥生土器片を含んでいた。そのため、その覆土から須恵器片の出土が無ければ、時期を繰り上げていた可能性があった。



第5図 第95・99・103次調査区全体図

SB15・16・17は第11次調査で確認された住居群とで、原野谷川に面した崖上に弥生中・後期の居住域を形成しており、SB18付近には多くの弥生期の遺構が存在している。SB12・14・18は主軸方向を磁北に向けるが、SB11のみ45度ほど東に向ける。また、SB18は東側、SB11及びSB14は北側に方マドを持つ。なお、SB11・12・14は重複する。

掘立柱建物跡 (SH)

第103次調査区から第10次調査区へまたがって発見された3間×1間の東西棟の建物 (SH18)で、古墳時代に属すると考えられる。また、第99次調査区中央部からは2間×3間で西側に1間の底を持つ奈良時代の建物 (SH19)の棟方向は、磁北より約10度ほど西に向く。柱穴は隅丸方形で柱の抜き取り痕が残る。第5・6・8次調査区で発見された倉庫群の北側区画溝より北側では第97・101・102・104・105・106次調査区のSH49の2棟で、他には周囲に同時の建物は確認できない。

方形周溝墓 (SZ)

方形周溝墓は弥生時代中期のもので、第26・55調査区から連続するもので、5基 (SZ 6・13・14・17・18)が確認された。全てマウンド及び主体部残されていなかった。四隅に陸橋をもつ東海・南関東型中期方形周溝墓であるが、SZ 6・13・18は平面形態が長方形を呈し、長辺が約14m、短辺が約8mを計る。また、両墓に挟まれたSZ14は短辺が6mと短い。SZ17は正方形形状を呈し、一辺8mを計る周辺で確認された周溝墓と同様で、互いに溝を結合し再利用して構築されている。出土遺物は溝内から土器のみのである。

溝 (SD)

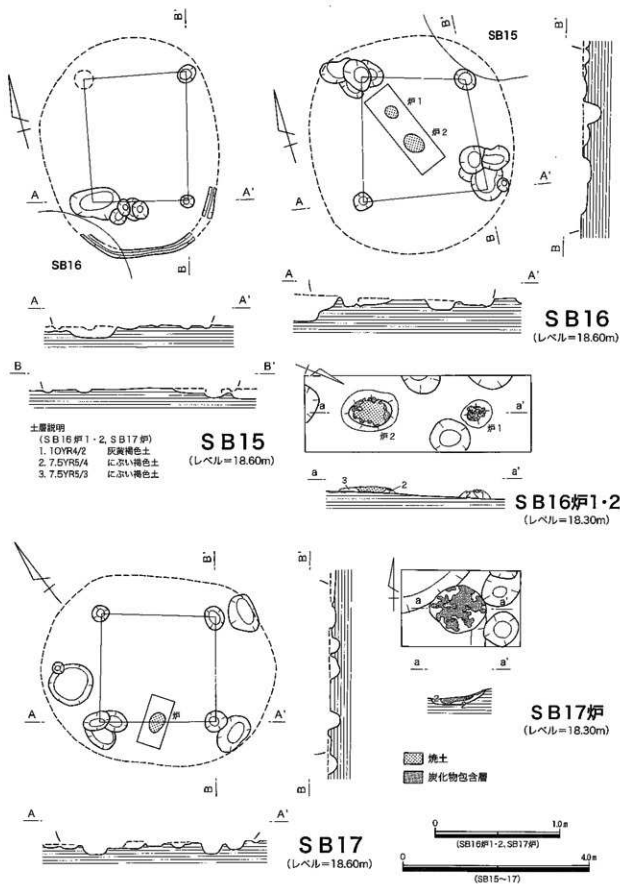
第7次調査区へと南北にのびる近世溝4・8が確認された。この溝は近代の土地割とも合致するもので、北側に道路が造られる前まで使われていた地境の溝と見られる。幅0.8mを計るこの溝は調査区南端で直角に折れ西方向に向かい第10次調査区の近世溝8へと合流する。この近世溝8は第99次調査区南西隅で直角に曲がり近世溝7となる。また、第103調査区の北西側で近世溝6が東西方向で確認され、調査区のほぼ中央部で直角に曲がり北上することが第7次調査区で確認されている。第95次調査区東側で検出された溝 (SD7)はこの調査区内で終結し南へは延びない。このSD 7は幅1.2mを計り、床面近くから宝篋印塔の笠部が上下逆転の状態を確認された。

土坑 (SK)

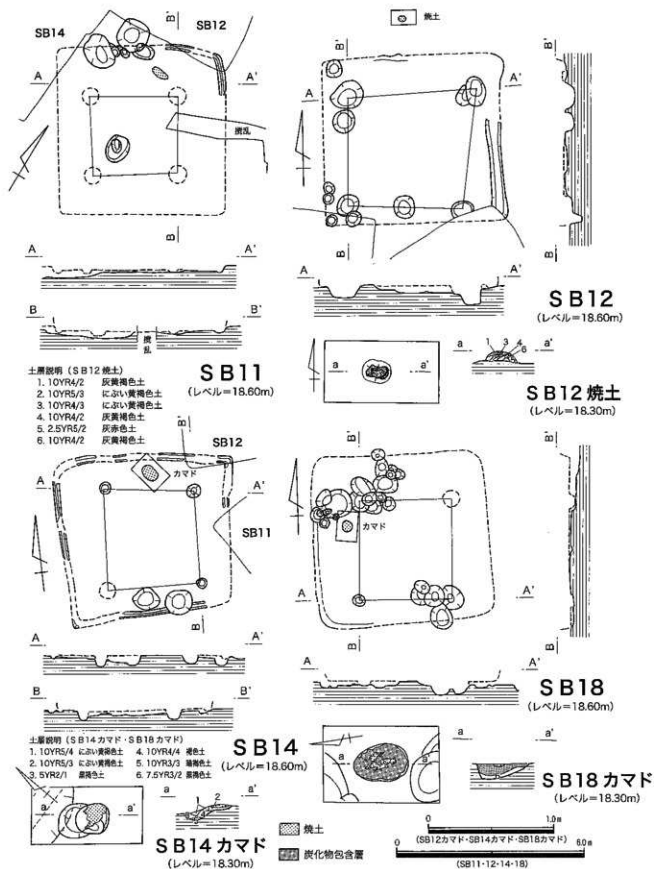
第99調査区西側では不整形の土坑SK89、その北東側で円形のSK87、隅丸方形のSK88が発見された。また、第103次調査区北側隅丸長方形で長辺2m・短辺1.5mを計るSK91・92・93の3基が重複して発見された。SK89は近世溝と重複し平面形状 (4×3m)が把握しにくいのがSK49と同じ弥生時代に属する遺構である。SK87 (直径1m)は井戸とも推定できなくはない遺構である。また、SK91・92・93の3基は近世に属すると見られ、3基とも形状が近似している。

柱穴 (SP)

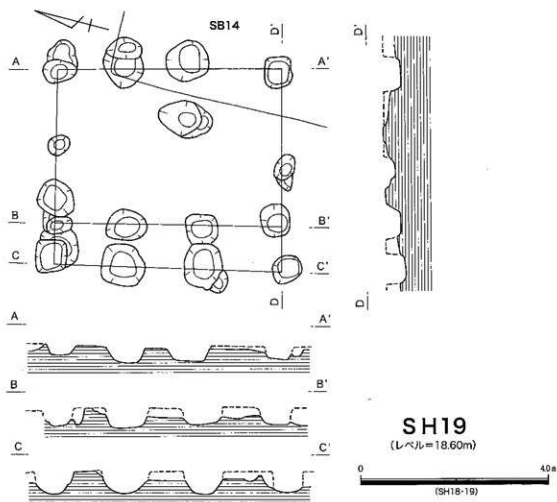
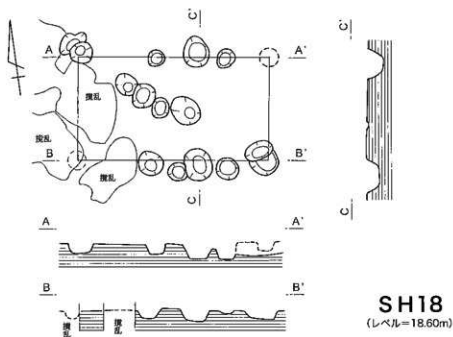
調査区内からは多くの柱穴と見られる小穴が確認された。その多くからは弥生土器片が出土することから弥生時代後期に属すると推定される。礎石や礎盤が入るものは無く、掘立柱建物として規格・規模を特定することは困難である。



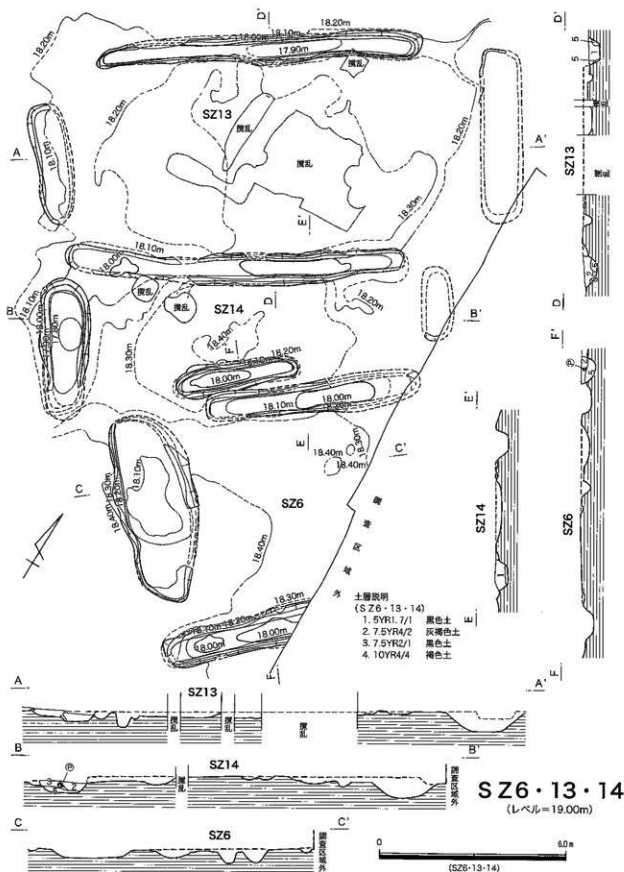
第6図 第95・99・103次調査区SB15・16・17 実測図



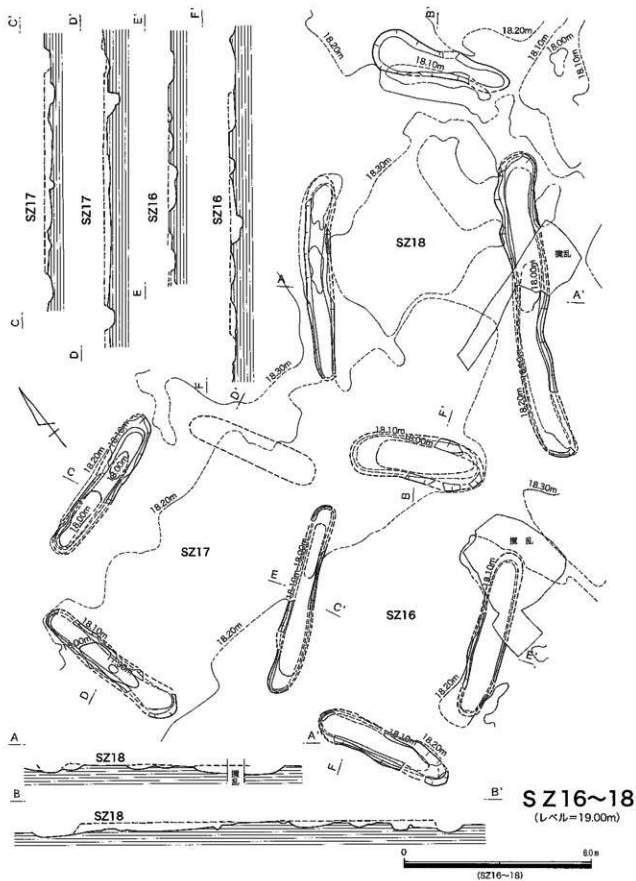
第7図 第95・99・103次調査区SB11・12・14・18 実測図



第8図 第95・99・103次調査区SH18・19 実測図



第9図 第95・99・103次調査区SZ 6・13・14 実測図



第10図 第95・99・103次調査区SZ16・17・18 実測図

2. 第96次調査区

本調査区(14BL-11)は、宅地造成に係る擁壁部分の調査区であるため、調査区がJ字状でほそ長く設定された。北側及び西側は第75・81次調査区と接しているため、古墳時代の竪穴住居や、方形周溝墓等の存在が想定されていた。この調査区においても包含層の残りは悪く、遺構確認面直上まで削平を受けていたが、弥生時代の竪穴住居跡(SB)3棟及び方形周溝墓(SZ)3基・七坑(SK)1基、古墳時代の竪穴住居跡(SB)3棟、前期の方形周溝墓(SZ)1基が発見された。

竪穴住居跡(SB)

調査区西側から弥生時代の竪穴住居SB17a・17b・17cの3棟の南側が検出された。また、重複して古墳時代の住居SB35・57a・57bが発見された。SB17bと17c及びSB57aと57bは建て替えと見られ、弥生時代のSB17a及び17b・17cは主軸方向を同じくする。古墳時代のSB35の主軸は磁北を向くがSB57a・57bの主軸は45度ほど傾く。この住居跡の西側は谷となるので地形に左右された可能性も考えられる。

方形周溝墓(SZ)

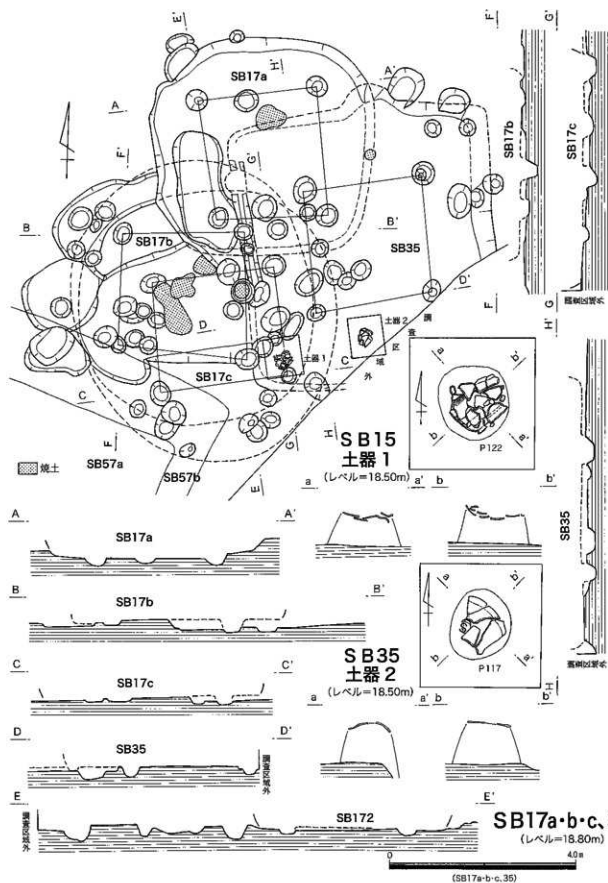
北側調査区の東側でSZ15及びSZ29の南側溝が確認された。一辺10mを計るこの周溝墓のマウンドは残されていない。この周溝墓の主軸は磁北方向となり、溝を共有して東側にSZ29が並ぶ、また、調査区南端からはSZ7の東側半分が発見された。この周溝墓はSZ15・29とは主軸方向を異にしている。3基は四隅に陸橋をもつタイプの周溝墓で、弥生時代中期の属すると考えられる。また、SZ15・29に近接するSZ16の主軸は約45度傾く。また、この周溝墓は四隅に陸橋を持たないタイプで、一辺13mを計り、第81次調査時の所見では古墳時代前期のものと推定している。なお、この周溝墓は南側約半分が調査区外へ広がり、主体部は確認出来なかった。

土坑(SK)

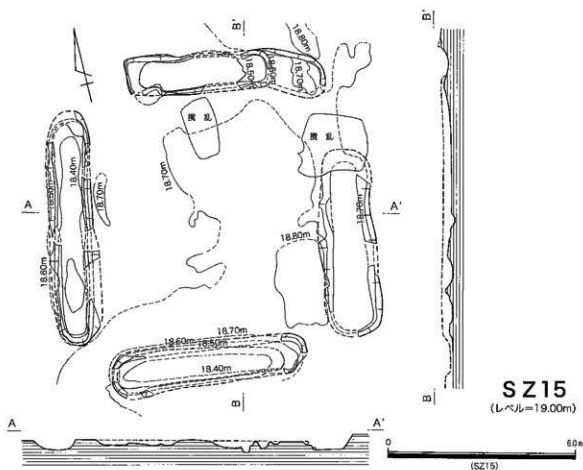
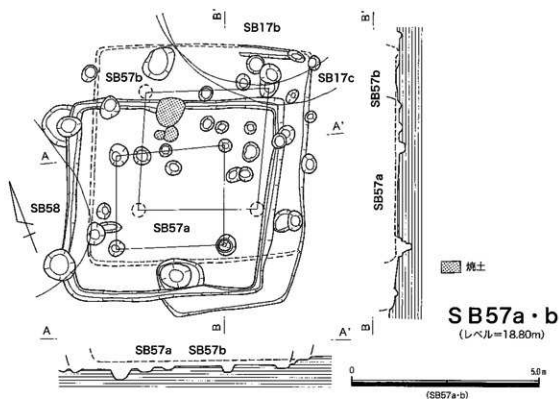
調査区南端でSZ7の東側溝と重複してSK66が確認された。楕円状の土坑で炭化物が堆積しているのが確認されたため、竪穴住居跡と推定して掘削を行ったが、周囲からは住居の掘り込みや柱穴等は調査区内では確認できなかった。



第11図 第96次調査区全体図



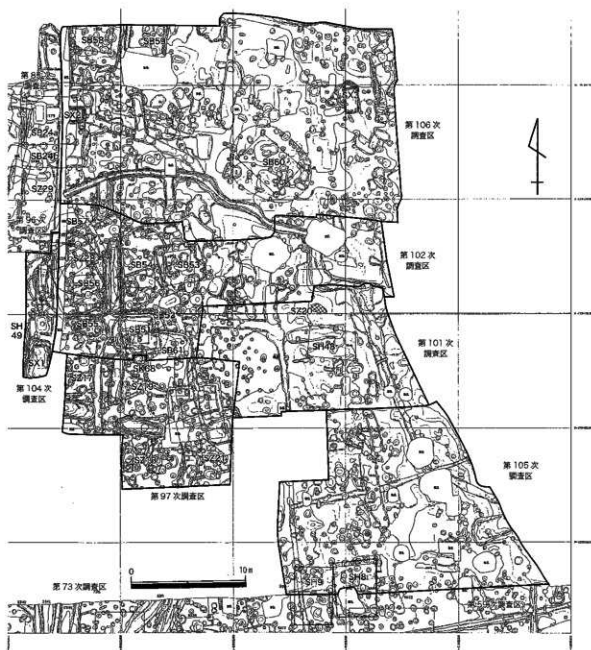
第12図 第96次調査区 SB17a・17b・17c・35 実測図



第13図 第96次調査区 SB57a・57b SZ15 実測図

3. 第97・101・102・104・105・106次調査区

区画整理事業の北東隅に集中する第97・101・102・104・105・106次調査は、宅地として利用されてきた。住宅基礎が一部残り、調査区東側では包含層が薄く、東側側では表土直下で地山の礫層となり遺構はこの礫層に埋込まれている。西側半分にはその礫層の上にある褐色土で遺構は検出された。また、住宅移転に伴い庭木の掘り抜きによる極最近造られたカクレン坑等が多数見られる中、掘立柱建物等が発見された。6調査区からは弥生時代の竪穴住居跡6棟及び方形周溝墓4基、古墳時代の竪穴住居跡7棟・掘立柱建物3棟・土坑2基・屋外カマド1基、奈良時代の竪穴住居跡1棟・掘立柱建物1棟・土坑1基、近世のため池状遺構(SX1)、方形土坑(SX2)及び地下室状遺構(SX3)が発見された。



第15図 第97・101・102・104・105・106次調査区全体図

竪穴住居跡 (SB)

第102調査区西側に5棟がまとまって発見された。このうちSB55・56・57は建て替えと見られ、近接してSB54が建つ。また、SB54の南に小型のSB52が建つ。この5棟では炉は失われ、主軸方向はSB52・54・55が磁北を指し、SB56・57は西へ30度ほど向く。4棟の平面形状は小判型で壁溝が残る。第106調査区の東側でSB60が1棟離れて発見された。この住居跡はほとんど削平され、壁溝等は残されていない。主軸方向は西へ40度ほど傾き、小判型の平面形状を持っていたと推定される。古墳時代の竪穴住居跡は、南より第97次調査区でSB36と37が重複して発見され、第102次調査区でSB53、第106次調査区では北側の調査区外へ伸びるSB58・59とともに西側の第81次調査区にまたがってSB24a・SB24bが発見された。SB36・37・SB24a・SB24b・58はほぼ同規模で一辺10mの隅丸形状を呈する。また、SB53・59はやや小ぶりで一辺6m前後である。どの住居跡も主軸は磁北を向くが、SB37・53が西へ10度、SB58は東へ10度程向く。この6棟のカマドは失われていた。第102次調査区で発見されたSB51は、その覆土から円面硯が出土した。この住居は出土遺物から奈良時代に属していると考えられ、弥生時代のSB52と重複する。

掘立柱建物跡 (SH)

第105次調査区から第73次調査区へまたがって発見された3間×3間の建物 (SH 9) 及び3間×間の5間で南北棟のSH 8と第105次調査区東側で1間×3間の東西棟のSH48が発見された。このSH48は北側に屋外炉が付属し、3棟とも古墳時代に属すると考えられる。また、第104次調査区からは奈良時代に属すると見られる、側柱2間分の掘立柱建物 (SH49) が発見された。全体規模は調査外におよぶため不明であるが、柱穴は1m前後を測る隅丸方形を呈する。柱列は磁北方向に並び、第5・6・8次調査区で発見された倉庫群の北東側には、このSH49とSB51の2棟が建つ。

方形周溝墓 (SZ)

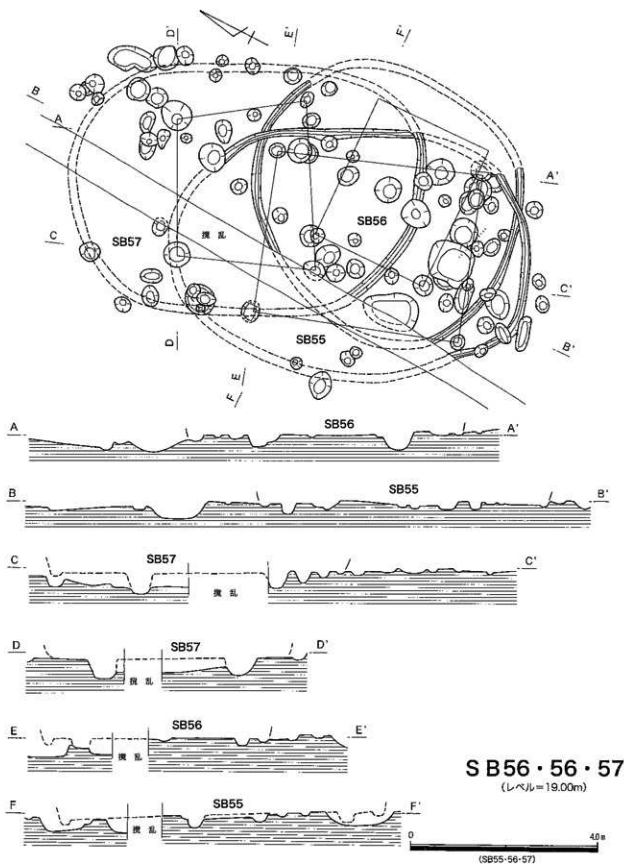
方形周溝墓は弥生時代中期のもので、南よりSZ17・19・28・29と並び、東側に1基単独でSZ20が発見された。いずれもマウンド及び主体部残されていない。四隅に階橋をもつ東海・南関東型中期方形周溝墓であるが、SZ17・19・28は正方形形状を呈し、一辺7mを計る。SZ20は平面形態が長方形を呈し、長辺が約10m、短辺が約7mを計る。主軸は総て磁北を向く。SZ17・19・28・29は溝を共用しており、連続して造られたと見られる。

土坑 (SK)

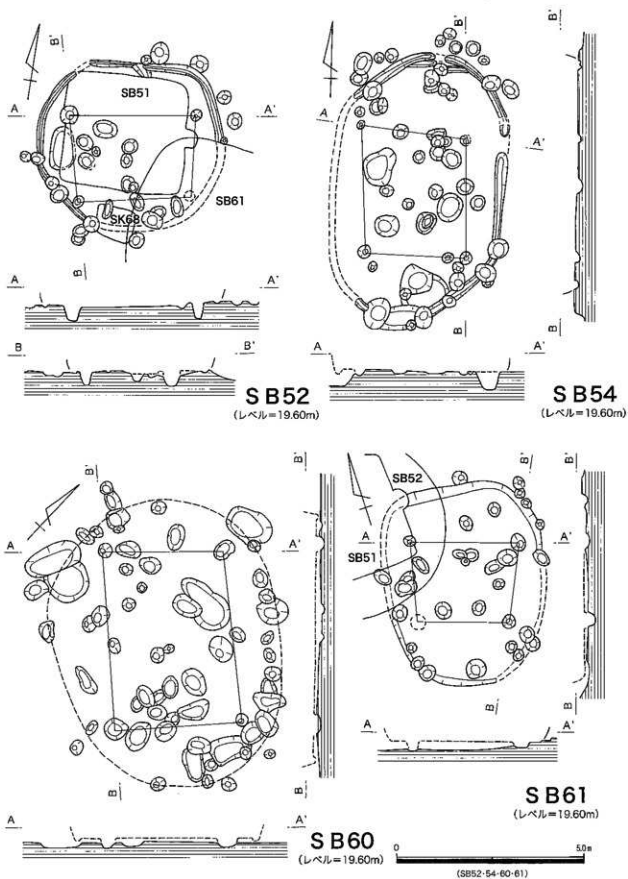
第97次調査区で発見されたSK68は一辺1mを計る隅丸正方形の平面形状もつ遺構で、北側には円面硯を出土したSB51が位置する。須恵器の蓋の破片ばかりの出土で、その中に墨書土器 (文字不明) が1点含まれていた。この土坑の東側には近世に広く掘込まれたようで、同時の他施設は確認されていない。

その他遺構 (SX)

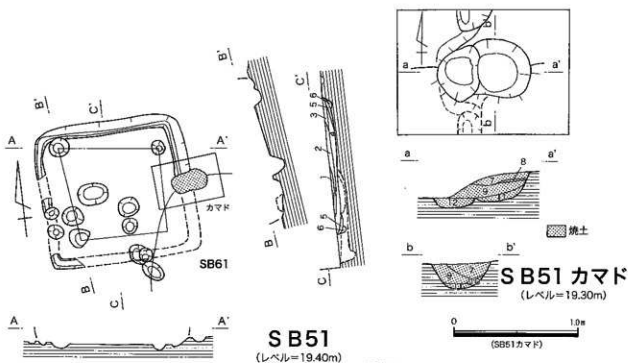
第104次調査区のSX1及び第106次調査区のSX2はその出土遺物から近世に属する遺構と見られ、SX1は東西2.30m、南北3.20mを計る不整形であるが、隅丸長方形に近い平面形状となると推定され、貯水施設の可能性があり、瓦及び近世陶磁器の出土と木製で護岸施設が出土した。また、SX2は一辺3mを計る隅丸方形の遺構で近世陶磁器が出土した。SX3は第106次調査区の東側で発見された。長辺は南北を向き、北側に出入りのための階段状の掘り込みもある。長辺は2.95m、短辺1.45m、深さ0.97mを計り、底部には東西の壁際には4基ずつ、南壁際には1基の柱穴が確認された。地下室と見られる遺構で、この第106次調査区付近は近世の陣屋跡という言い伝えが地元に残るが、明確な遺構や記録が無いので、周辺の近世に属する遺構との関連の検討が必要であり、絵図等資料の発見が待たれる。



第16図 第97・101・102・104・105・106次調査区 SB55・56・57 実測図

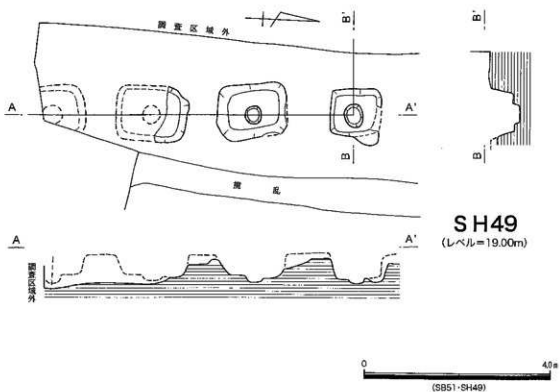


第17図 第97・101・102・104・105・106次調査区 SB52・54・60・61 実測図

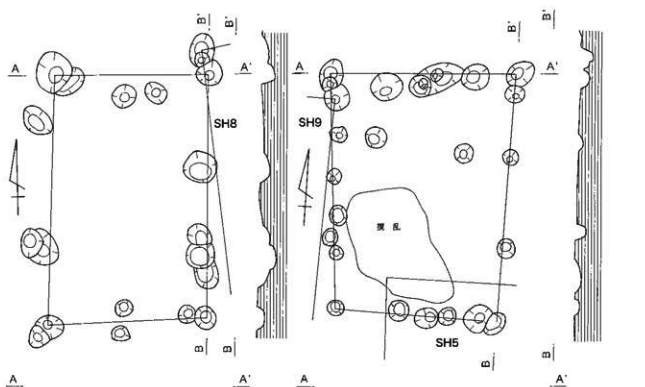


土層説明

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1. 10YR3/2 暗褐色土 | 7. 7.5YR3/4 暗褐色土 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 8. 10YR3/3 暗褐色土 |
| 3. 10YR2/3 暗褐色土 | 9. 10YR3/3 暗褐色土 |
| 4. 10YR4/4 褐色土 | 10. 10YR4/2 にがい黄褐色土 |
| 5. 10YR3/4 暗褐色土 | 11. 10YR4/3 にがい黄褐色土 |
| 6. 10YR3/4 暗褐色土 | |



第20図 第97・101・102・104・105・106次調査区 SB51 SH49 実測図



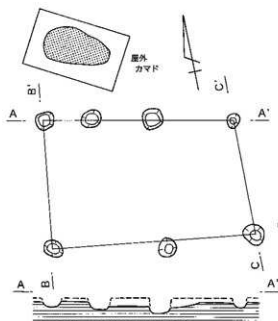
SH9
(レベル=20.00m)



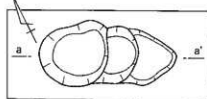
SH8
(レベル=20.00m)

土層説明 (SH48 屋外カマド)

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 7.5YR4/3 褐色土 | 6. 5YR5/4 にぶい赤褐色土 |
| 2. 7.5YR4/4 褐色土 | 7. 5YR6/8 褐色 |
| 3. 7.5YR5/6 明褐色土 | 8. 10YR4/3 にぶい赤褐色土 |
| 4. 7.5YR4/6 褐色土 | 9. 7.5YR4/4 褐色土 |
| 5. 5YR5/8 明赤褐色土 | |



SH48
(レベル=19.60m)



焼土

SH48 屋外カマド
(レベル=19.50m)

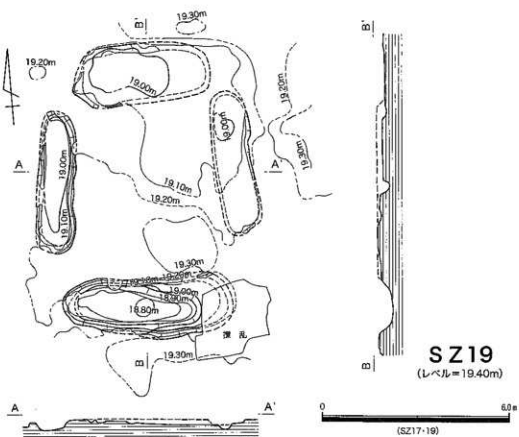
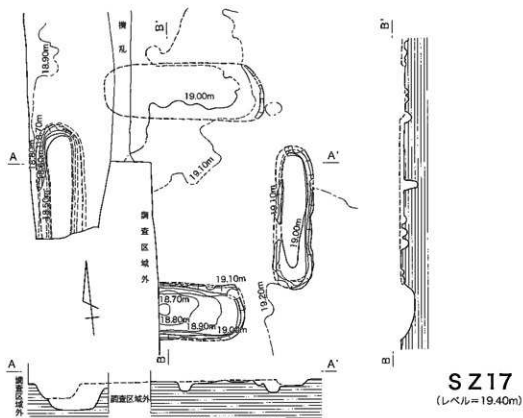
0 1.0m

(SH48 屋外カマド)

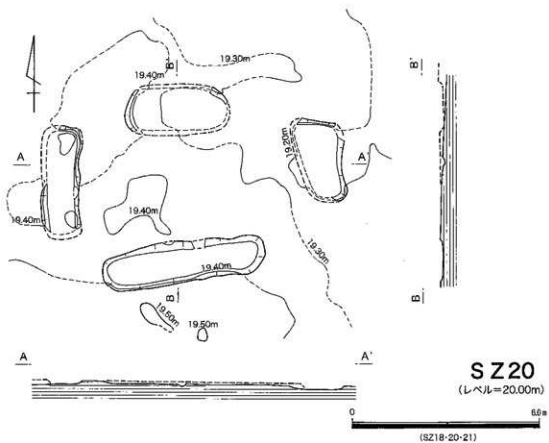
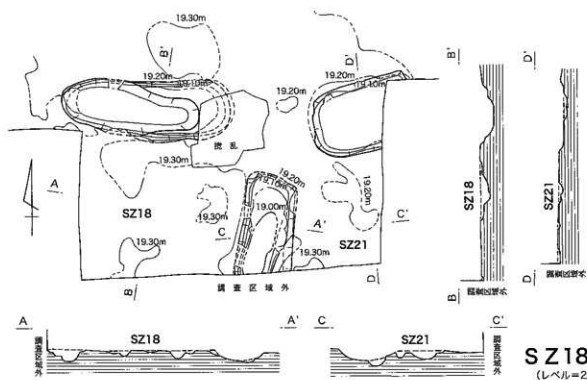
0 4.0m

(SH8-9-48)

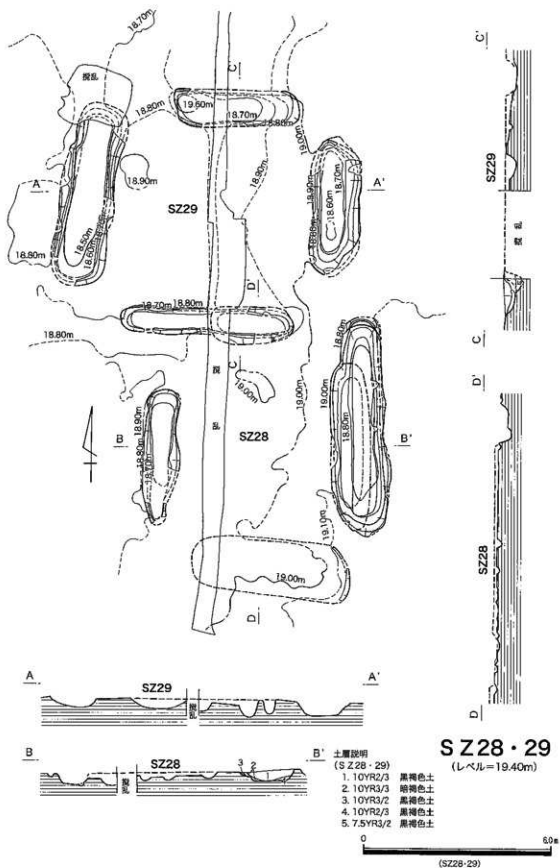
第21図 第97・101・102・104・105・106次調査区 SH 8・9・48 実測図



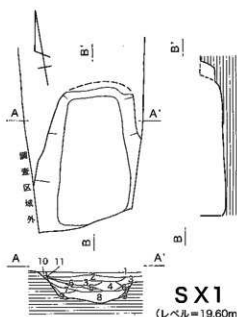
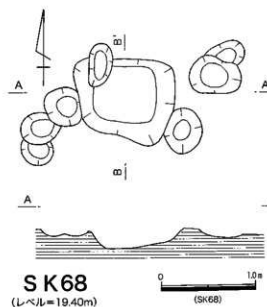
第22図 第97・101・102・104・105・106次調査区 SZ17・19 実測図



第23図 第97・101・102・104・105・106次調査区 SZ18・20・21 実測図

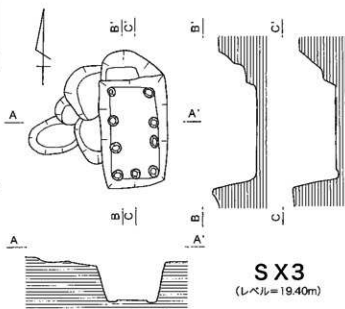
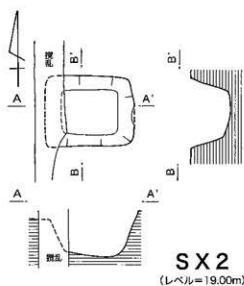


第24図 第97・101・102・104・105・106次調査区 SZ28・29 実測図



土層説明 (S X 1)

- | | | |
|------------------|------------------|----------------------------|
| 1. 5YR5/2 灰褐色土 | 7. 5Y3/1 オリーブ黒色土 | 8. 5Y3/1 オリーブ黒色土 (餅・瓦片多数含) |
| 2. 2.5YR5/2 灰白色土 | 8. 5Y3/1 オリーブ黒色土 | 9. 5Y4/2 灰オリーブ色土 |
| 3. 5YR4/1 褐色土 | 9. 5Y4/2 灰オリーブ色土 | 10. 10YR3/4 暗褐色土 |
| 4. 5Y3/2 オリーブ黒色土 | 10. 10YR3/4 暗褐色土 | 11. 10YR3/2 暗褐色土 |
| 5. 2.5YR5/2 灰白色土 | 11. 10YR3/2 暗褐色土 | |
| 6. 5Y4/1 灰色土 | | |



第25図 第97・101・102・104・105・106次調査区 SK68 SX1・2・3 実測図

4. 第98次調査区

区画道路15号線予定地及び15BL-8の調査は、宅地として利用されてきた場所である。弥生時代の竪穴住居跡（SB33）と方形周溝墓3基、古墳時代の竪穴住居跡3棟、近世の区画溝等が発見されたが調査区が道路予定地のため、南北に長く東西が短いため、全容が確認出来た遺構は少ない。また、調査区を東西に横切る近世の区画溝が多く発見され、SD83が調査区内で屈曲し南へ、SD82が屈曲し北へ向くのが確認された。

竪穴住居跡（SB）

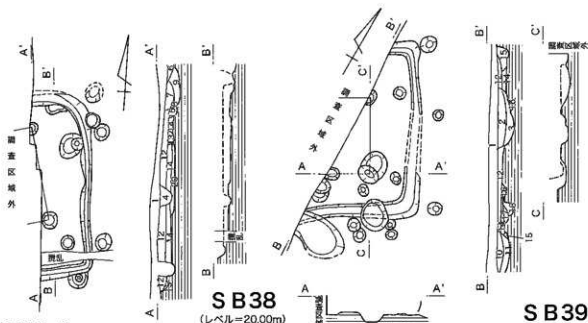
調査区南端では第94次調査区でそのほとんどが確認されたSB33の一部を発見した。また、調査区中央付近で西側の調査区外に及ぶ古墳時代の3棟（SB38・39・40）の住居跡が発見された。一辺5mを計る隅丸方形を呈し、カマドは確認されていない。



第26図 第98次調査区全体図

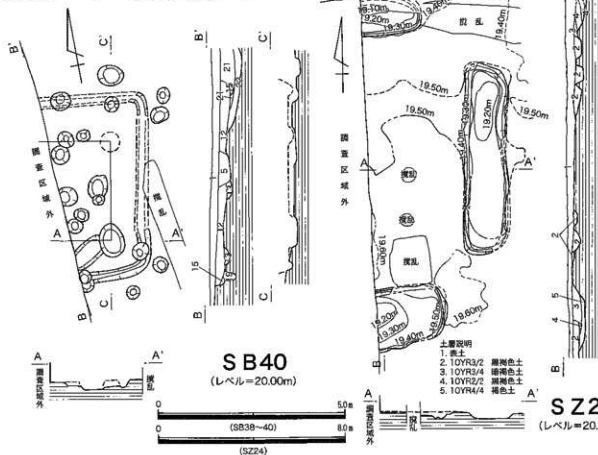
方形周溝墓（SZ）

本調査区からは3基の方形周溝墓が確認されるが、3基とも遺構は調査区外へ及ぶため全容は不明である。調査区北端のSZ24は南北約15mを計り、主軸方向は磁北を向き、平面形状は方形となると見られる。マウンドは失われ、主体部は残されていない。SZ24の南側に近接して確認されたSZ23は南北約8mを計り、主軸方向は10度ほど東を向き、東西方向が長軸となる。主軸は第94次調査区のSZ9と同様で、SZ24及びSZ8とは異なり、時期差と見られる。マウンドは失われ、主体部は残されていない。南端のSZ8は東西16.5mを計る大型の周溝墓で、主軸方向はSZ24と同方向の磁北を向き、平面形は方形となると見られる。主体部推定地は調査区外となり、マウンドは失われている。3基とも四隅に陸橋を持ち当遺跡で一般的な周溝墓である。



土層説明 (S B38・39・40)

- | | | |
|------------------------|---------------------|-------------|
| 1. 赤土 | 10. 10YR3/2 暗褐色土 | SK |
| 2. 10YR3/2 暗褐色土 | 11. 10YR4/3 に近い黄褐色土 | |
| 3. 10YR3/2 暗褐色土 (小砂利含) | 12. 10YR3/2 暗褐色土 | SB |
| 4. 10YR4/3 に近い黄褐色土 | 13. 10YR2/3 暗褐色土 | |
| 5. 10YR4/2 灰黄褐色土 | 14. 10YR2/2 暗褐色土 | SB 38-39-40 |
| 6. 10YR4/3 に近い黄褐色土 | 15. 10YR3/3 暗褐色土 | |
| 7. 10YR4/3 に近い黄褐色土 | 16. 10YR4/4 褐色土 | SD81 |
| 8. 10YR4/2 灰黄褐色土 | 17. 10YR3/2 暗褐色土 | |
| 9. 10YR3/2 暗褐色土 | 18. 10YR2/2 暗褐色土 | |



第27図 第98次調査区 SB38・39・40 SZ24 実測図

5. 第100次調査区

県道袋井小等線に近接した調査区で住宅移転後に調査に着手し、弥生時代の竪穴住居跡8棟と方形周溝墓4基、古墳時代の竪穴住居跡2棟、奈良時代の掘立柱建物1棟、近世の区画溝等が発見された。

竪穴住居跡 (SB)

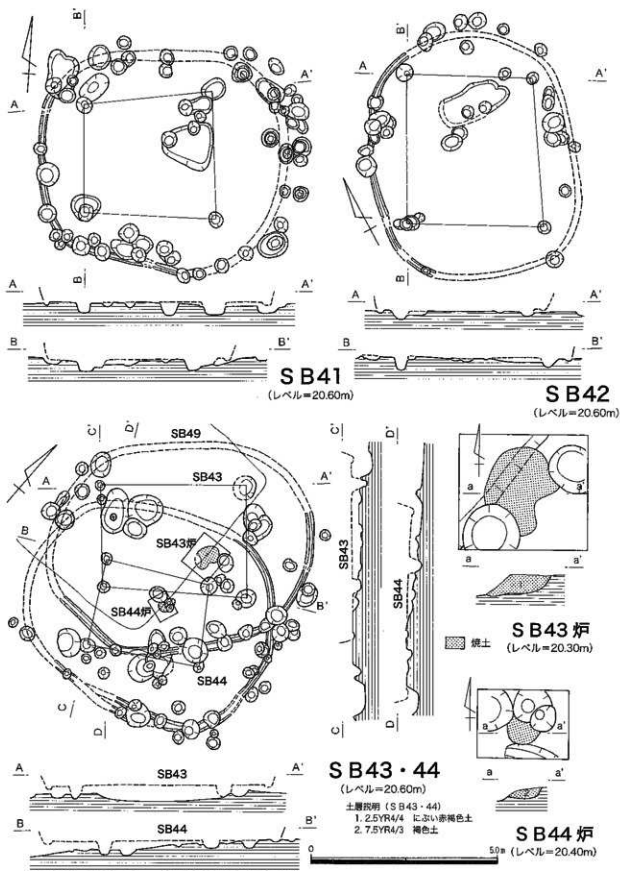
調査区周囲に添って弥生時代の竪穴住居跡が8棟 (SB41～48) 発見され、SB46～48の3棟が調査区外へと広がる。このSB47・48の平面形状が円形になる以外は楕円形を呈し、SB41・45・46・47・48は主軸を東西方向に向ける。SB42・43の主軸は磁北より東に30度ほど振り、SB44は磁北より60度ほど振っている。SB41・42では炉は失われているが、他の住居では、ほぼ中央に設けられている。また、古墳時代のSB49・50は、その主軸をほぼ磁北に向けている。一辺6mを計る隅丸方形を呈している。

掘立柱建物 (SH)

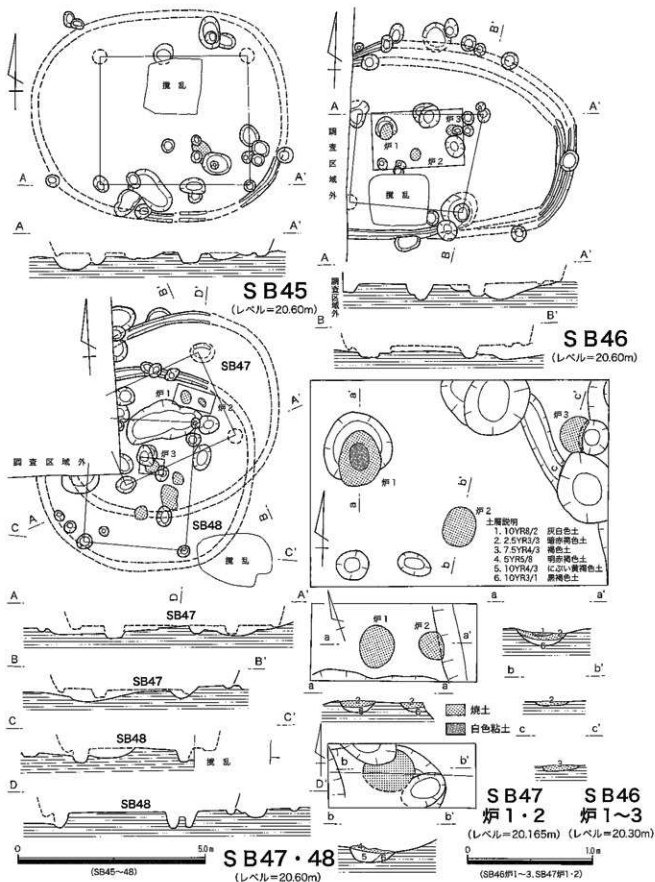
第60次調査によって南半分が発見されたSH12は、南北5間で東西3間の規模であったことが判明した。第60次調査の所見どおり、数度の建て替えがあったようであり、柱穴が重複していた。柱穴は一辺が約1m四方のもので、最終的に柱は抜き取られたようで礎石が柱穴中央部残されていたものは無かった。この遺構は奈良時代に属すると考えられるが、周囲には同時の建物遺構は確認されていない。北側の上坑からは瓦片の出土があったが、数片で屋根を葺くほどの量は無い。



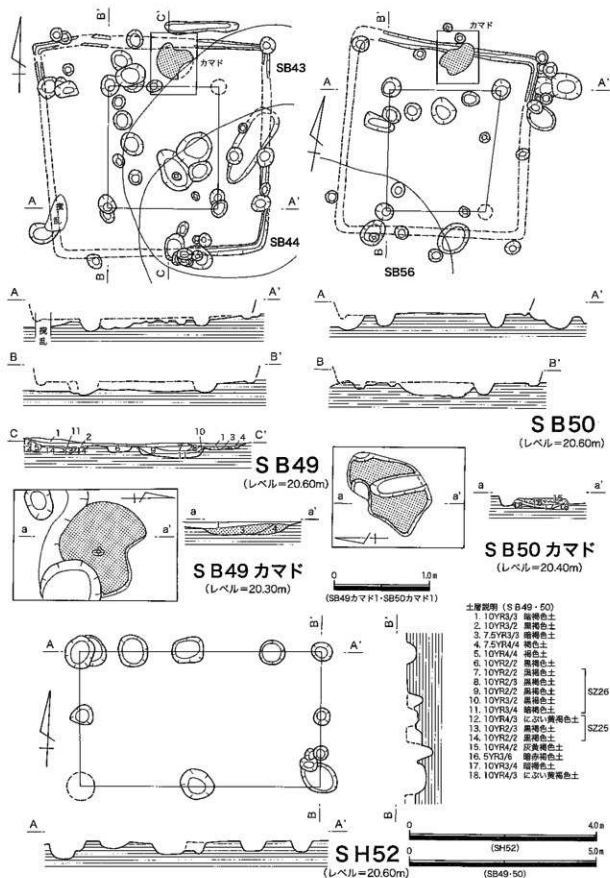
第29図 第100次調査区全体図



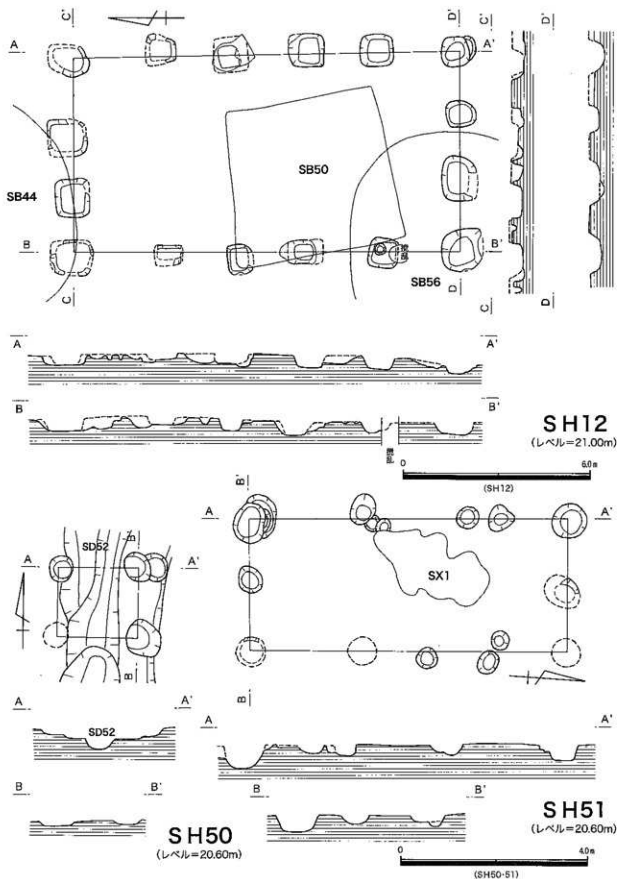
第30図 第100次調査区 SB41・42・43・44 実測図



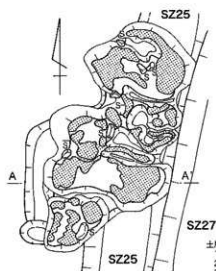
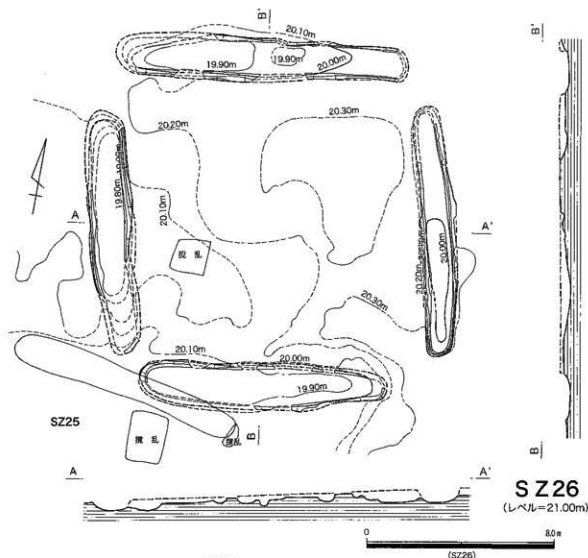
第31図 第100次調査区 SB45・46・47・48 実測図



第32図 第100次調査区 SB49・50 SH52 実測図



第33図 第100次調査区 SH12・50・51 実測図



土層説明 (SX1)

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 7.5YR3/3 暗褐色土 | 11. 7.5YR3/3 暗褐色土 |
| 2. 5YR6/3 灰褐色土 | 12. 5YR6/4 紅っぽい褐色土 |
| 3. 7.5YR3/3 暗褐色土 | 13. 7.5YR3/3 暗褐色土 |
| 4. 7.5YR3/3 暗褐色土 | 14. 7.5YR3/3 暗褐色土 |
| 5. 5YR7/4 紅っぽい褐色土 | 15. 5YR6/4 紅っぽい褐色土 |
| 6. 7.5YR3/3 暗褐色土 | 16. 7.5YR4/3 褐色土 |
| 7. 5YR6/6 褐色土 | 17. 5YR7/6 褐色土 |
| 8. 7.5YR3/3 暗褐色土 | 18. 7.5YR4/3 褐色土 |
| 9. 7.5YR3/3 暗褐色土 | 19. 7.5YR3/1 黒褐色土 |
| 10. 5YR7/4 紅っぽい褐色土 | 20. 7.5YR3/2 黒褐色土 |
| | 21. 7.5YR3/1 黒褐色土 |
| | 22. 7.5YR4/1 褐色土 |
| | 23. 7.5YR3/2 黒褐色土 |

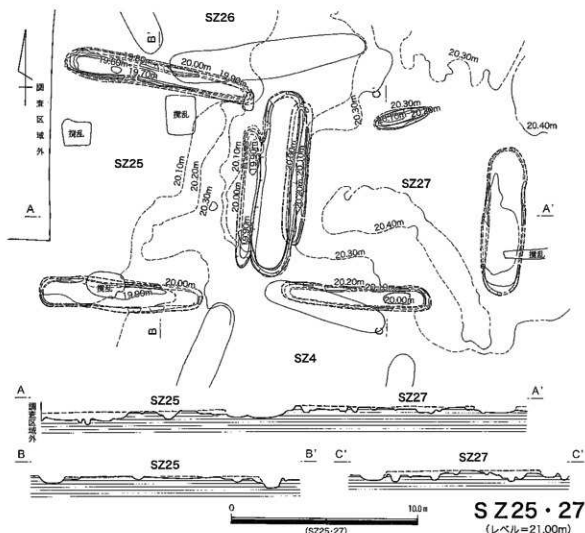
第34図 第100次調査区 SZ26・SX1 実測図

方形区画溝 (SZ)

調査区内で2基 (SZ25・27)、北側調査区と南側調査区へまたがるものがそれぞれ1基ずつの4基が発見された。4基ともマウンドは残されておらず、主体部も無い状態で、四隅に陸橋があるタイプのものである。SZ25は一辺14mを計り、西側の区画溝が調査区外におよんでいる。SZ27は西隣のSZ25とほぼ同じ規模で主軸方向も近く磁北方向を向くが、北側の区画溝が貧弱である。しかし、出土遺物をみると、SZ25が先に造られ、後にSZ27となる。南側のSZ 4はそのほとんどが第60次調査区で確認され、北側の区画溝がSZ27と重複しているのが確認された。また、北側のSZ26は近世の区画溝等と重複が激しく、北側調査時には周溝墓として認定されていないが、本調査区で確認された南区画溝とSD48とSD54bを東西の区画溝として認定した。

その他遺構 (SX)

SZ25東側区画溝覆土上に焼土が集中したSX 1を検出した。出土遺物が少なく、時期特定には至らなかったが、その堆積状況は焼土と炭化物層が重層していることから長期間使用されていたと見られる。



第35図 第100次調査区 SZ25・27 実測図

第2節 遺物

1. 95～106次調査区出土遺物

第95・99・103次調査区(第36・37・38図)で出土した弥生時代の遺物は、SZ 6から台付甕11・12、SZ13周溝より高坏1・2・3、壺6・8、台付甕14・16・18、SZ14の高坏4、壺5・7、台付甕15・13・19・20・21及びSZ17からは台付甕17、SZ18からは壺9・10の出土があった。総じて弥生時代の遺物は後期後半のものが中心で細片が多い。この段階特有の有段羽状刻突文を有する壺片が多いなか、嶺田式期に属すると見られる6の他にこの段階のものも少量も確認された。古墳時代後期の遺物は、SB11の須恵器甕26、SH12の須恵器杯24で、SK87の上師器杯23・甕27・甕25が出土した。奈良期の遺物はSH19の柱穴から手捏ね成形で指頭痕の残る碗状のミニチュア土器28の出土があった。

中近世の遺物は近世溝4から、焼が甘く褐色の無釉茶碗22と青磁碗39の出土があった。平瓦22は凹凸両面にはへら等の調整工具痕は確認できない。39は龍泉窯系と見られ、淡灰緑色の釉薬はやや厚手で、高台内部は無施釉で鉄分の作用によって赤褐色となっている。SD 7から灰釉陶器碗29とともに小型の宝篋印塔の傘部59が天地裏返しに出土した。この宝篋印塔は軟質の砂岩であるため表面の摩擦が激しく、保存状態は不良で表面に傷が多く、打痕の可能性もあるが、草花のような模様を読み取ることができたので図示した。カワラケはSD 7から30～36、SD 8の38、SF29の37で、ロクロ成形で、底部は糸切り痕が残る。法量分化後の小型品と見られ、17世紀に属すると考えられる。SD 7の40とSD29の41の丸碗は瀬戸産で17世紀前半と見られる。SD 7の44とSD 8の46・47、SD29の45の内耳銅は使用による損傷が激しく、ほとんどが平底の底部を欠損し、17世紀に属すると見られる。SD 8の揺鉢48～50は瀬戸産と見られ、17世紀前半以降と見られる。その他にはDS29から瀬戸産の天目茶碗42、片口碗43、SD8から土鍾51の出土があった。53～58の石器は小笠山礫層によく見られる砂岩質の円鏝で、53は楕円形を呈し、上部を欠き棒状の54とともに叩石である。55は礫石鏝で、56・57はその大きさと擦痕から擦石と見られる。58は石皿で、比較的扁平な台形の礫を使用しており、片面のみに研磨痕が見られる。

第96次調査区(第39・40・41図)の弥生時代の遺物として、SB17cの67及び折返山縁の壺73、SZ 7から60～63の壺、SZ16から高坏64、壺65・66・68～72、小型の壺70・119が出土した。

古墳時代後期の遺物としては、SB35の食膳具として土師器杯75～80、土師器高坏89～105及び須恵器蓋81・82、坏83～88、高坏106・107、調理具は土師器甕111～118及び台付甕120、貯蔵具は土師器の壺122、甕類121・123・124と須恵器の甕109、甕110が出土した。

第97・101・102・104・105・106次調査区(第42・43・44・45・46図)で出土した弥生時代の遺物は、SZ28から壺125及び包含層中から壺128、SZ17から壺127、SZ19から壺126・129～133とともに砂岩製の打製石斧269が出土した。総じて弥生時代の遺物は後期後半のものが中心で壺体部片が多い。また、嶺田式期に属すると見られる130の他にこの段階のものも少量も確認された。

古墳時代後期の遺物としては、SB36からは土師器杯134、甕137、甕135・136が、SB52からは土師器杯138・139、高坏140、甕141、甕142である。奈良後期と見られるSB51の食膳具は土師器蓋143～145、須恵器蓋146～208・219・220、碗226・227、坏身222～225、坏221及び無高台の236・240～246、高台杯228～235、灰釉陶器碗247～250、須恵器皿237、須恵器高坏251、白色の土師器高坏253、灰釉陶器壺257がある。調理具には土師器甕255・256、甕259、貯蔵具に須恵器壺252、甕254・258・260～262とともに、天地返し状態で覆土中より発見された円面碗263は視面と圈台が一体で作られ、中央には直径83mmの陸部とその周囲に幅18mmの海部が廻り、陸部は外周より僅かに低く、畢の痕跡が陸部及び海部に確認できる。圈台下部を欠損し形状が不明だが、依存部には透かし孔の痕跡は無い。また、SB51と同時期と見られるSK68からは須恵器蓋209～218と坏238・239が出土した。218は墨書土器で「三」か「王」と見られる。また、SB51及びSK68の出土器種とその数を見ると、須恵器蓋の量が多い。

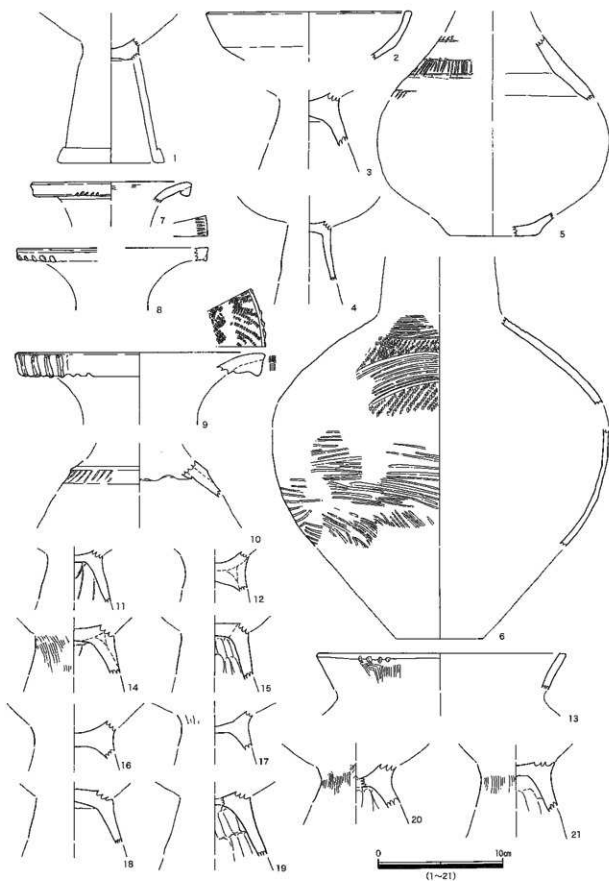
近世に属すると考えられるSH8柱穴からは265・266の陶磁器、SX 1からは使い減りして丘の中央が凹んでいる粘板岩製の碗264が大量の近世瓦片及び円鏝とともに出土した。265は染付の浅丸形の

小鉢で、口縁は輪花形で帯縁が廻る。外面には小菊で、内面は周囲には松竹梅と中央のひまわりのような菊の花から口縁に向けて伸びる帯状の区画に菊と青海波模様が連続して描かれている。呉須は暗紫色で透明釉は明灰色をおびる。高台内側で施釉の無い場所には灰白色の粘土粒が付着している。266は染付碗で口縁内外に帯縁、外面に水仙の花と葉及び二羽の蝶が舞う姿が描かれ、碗の下端で高台近くには、上下を帯縁で区画し二重の「へ」の字状の文様が連続して描かれている。内面見込みにはデフォルメされた鳥・草花及び雲と、それを囲むように二重の帯縁と幾何学模様が囲んで描かれている。呉須は紺青色で透明釉はやや明青灰色をおびる。また、267は開元通宝（初鋳621年）で小字タイプの銭を表に3枚の銅銭が接合している。268は至道元宝（初鋳995年）で草書調隸元タイプと見られる。共にSB37西側のpitから出土した。

第98次調査区（第47・48・49・50図）で出土した弥生時代の遺物は、SZ 8から高坏270～273、壺279～290、台付甕296～298が、SZ24から高坏274～278、壺291～295、SZ24から台付甕299～301の出土があった。古墳時代後期の遺物として、SB38から須恵器鉢312、土師器甕317、須恵器甕323とともに土鍾328・329、SB39の食膳具は須恵器蓋308・309、土師器高坏302～304・須恵器高坏313と須恵器器台と見られる315が出土した。調理具では台付甕319・320、甕326・327、貯蔵具として土師器壺316及び瓶類の324の出土があった。SB40の食膳具は須恵器蓋310・311及び土師器高坏305～307、調理具では台付甕321・322、貯蔵具は須恵器壺314、土師器甕318、瓶類325とともに土鍾330が出土した。叩石331・石皿332の石器は小笠山礫層によく見られる砂岩質の礫で、332は比較的扁平な礫を加工して使用しており、片面のみに研磨痕が見られる。

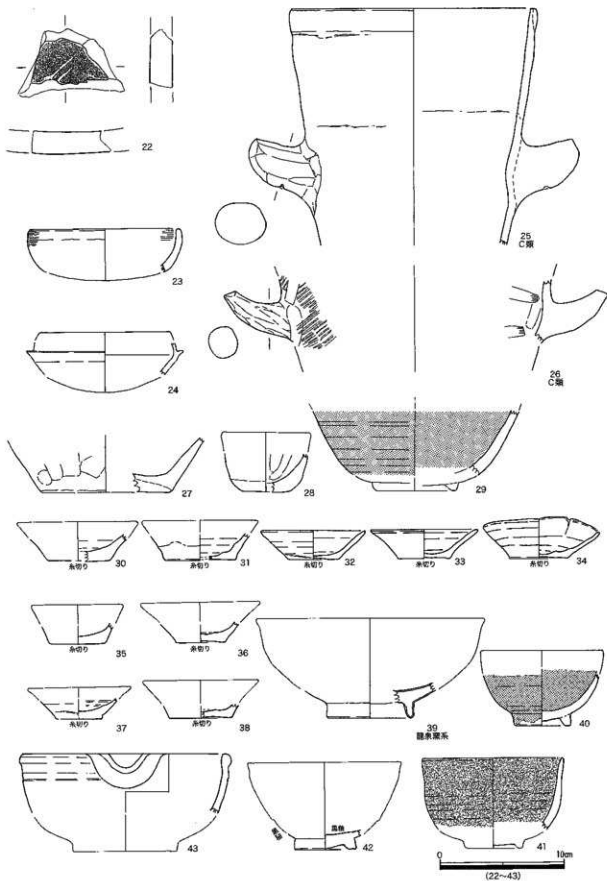
第100次調査区（第51・52・53・54・55図）で出土した弥生時代の遺物は、SB41・42・43・44・45・46・47・48・49から壺・甕等の出土があったが、細片が多く主だったものだけ図示する。SB42からは甕333、SB43から横線文の無い甕335及びミニチュア土器334の出土があった。SB45から肩部に横線文のある壺339～344及び、横線文などの装飾の無い336、台付甕337・338・345が出土した。SZ25・26・27の周溝からも壺・甕類が確認され、弥生中期後半の白岩式期に属すると考えられる。壺類の最大径は比較的低く、肩部には横線文が入るものが多い。胎土には小石が多く含まれ、全体的に内外面の調整痕の残りが悪く、粗悪な印象を受けるものが多く見られる。SZ25では肩部に横線文、そして下半は櫛状工具による刷毛目調整のある壺347、横線文と下部はミガキ調整の348、刷毛目のみの349ともに甕350、台付甕351～354、器高が低く鋳鉄の広口甕355～357が出土した。SZ27からは高坏358～360と壺373～375が出土した。358は口縁に刻みが施され、外面は刷毛目調整がなされている。359は口縁内側に折り返しを持ち、外面は刷毛目調整となる。360は台部分のみである。373～375の外面調整は刷毛目のみで沈線等による装飾の無い壺である。376は肩部に上下2段の横線文の間にS字文による区画帯を持つ。361～363・366～378・380～383は肩部に横線文が入る。365は1条の横線文の上に三角形を作る斜線文、下に斜格子文が施文される。367は4条の横線文の下部に3条の波状文が廻る。広口壺372は厚手の口縁に4条の横線が廻り、頸部から胴部最大径附近まで縦横と斜方向の櫛描文が入る。上段には約50mm毎に縦線文と横線文を交互に配し、下には左右の斜線文により三角形を描く。その下部に壺周囲を4分割するように縦線文区画で区切られた横線文、5段で横位の櫛描短線文が廻る。台付甕384～392が出土し、384～386・389・391・392には口縁に刻みが入り、392は口縁そのものが波状になる。古墳時代の遺物は、SB50からは小型の須恵器環蓋393、坏身394の出土があった。

奈良時代の遺構からの出土遺物は少なくSX1の覆土に須恵器環の細片が確認できた他、SH12とSH22との間にある土坑等から、白色で焼のあまい平瓦400～404の出土があったが、出土量が少なく細片であるため、SH12との関連性は低いと見られる。山茶碗397はSB45埋没後に掘られたpit、395はSH51の柱穴、396はSH52の柱穴からそれぞれ出土した。包含層からは出土した青磁碗399は龍泉窯系の碗で、淡灰緑色の釉薬はやや厚手で、内面見込みには片切彫りによる草文が施文され、内外面ともに貫入は無い。高台内部は無施釉で鉄分の作用で赤褐色となり、白色粒と窯道具の痕跡がある。また、Pitから出土した青磁碗398の釉薬は緑色の発色が悪く、明治期の米色青磁に近い色呈する。



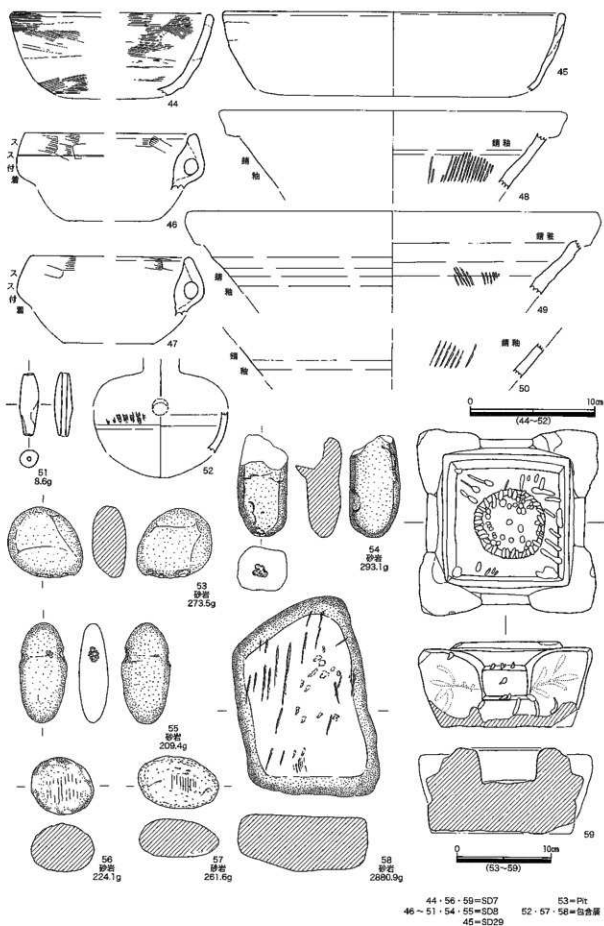
11・12=SZ6 17=SZ17
 1・3・6・8・14・16・18=SZ13 9・10=SZ18
 4・5・7・13・15・19~21=SZ14

第36図 第95・99・103次調査区 出土遺物 実測図1

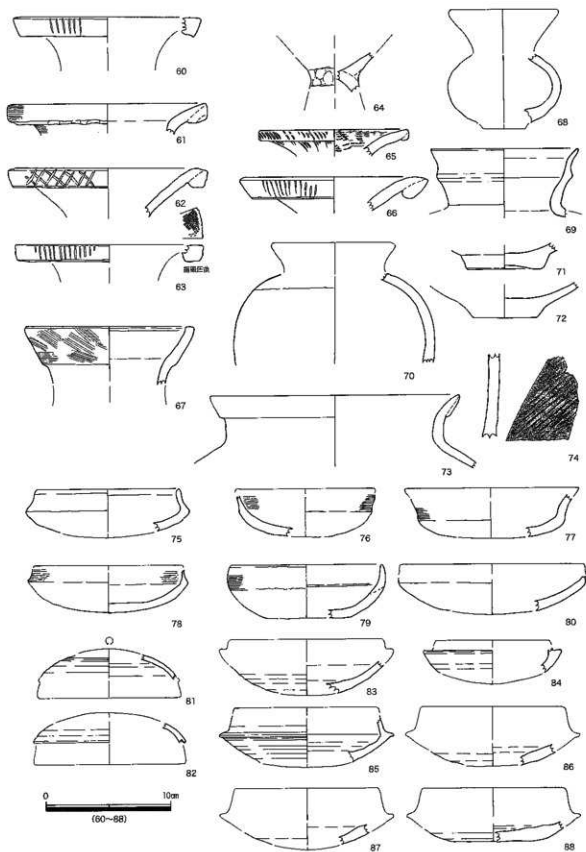


26=SB11 37・41~43=SD29
 22・39=SD4 24=Sh12
 29~36・40=SD7 28=Sh19
 38=SD8 23・25・27=SK87

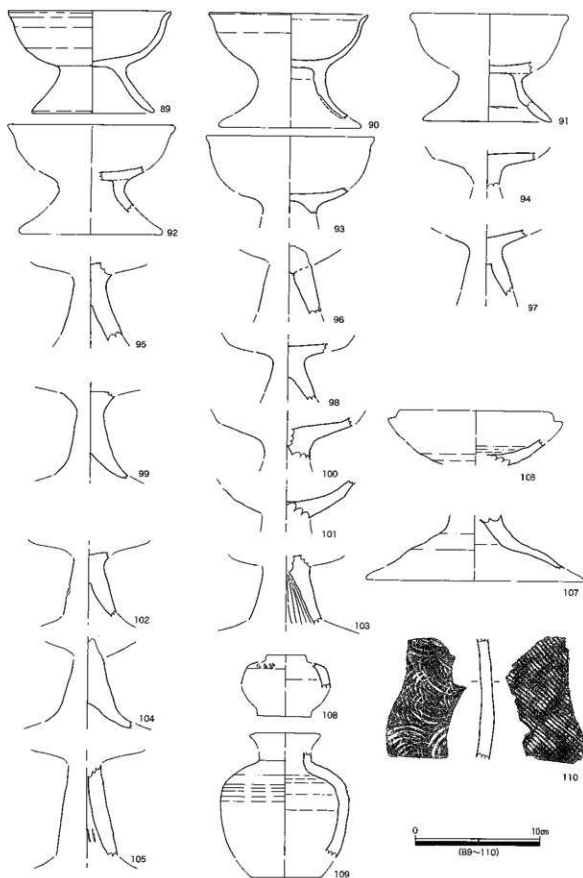
第37図 第95・99・103次調査区 出土遺物 実測図2



第38図 第95・99・103次調査区 出土遺物 実測図3

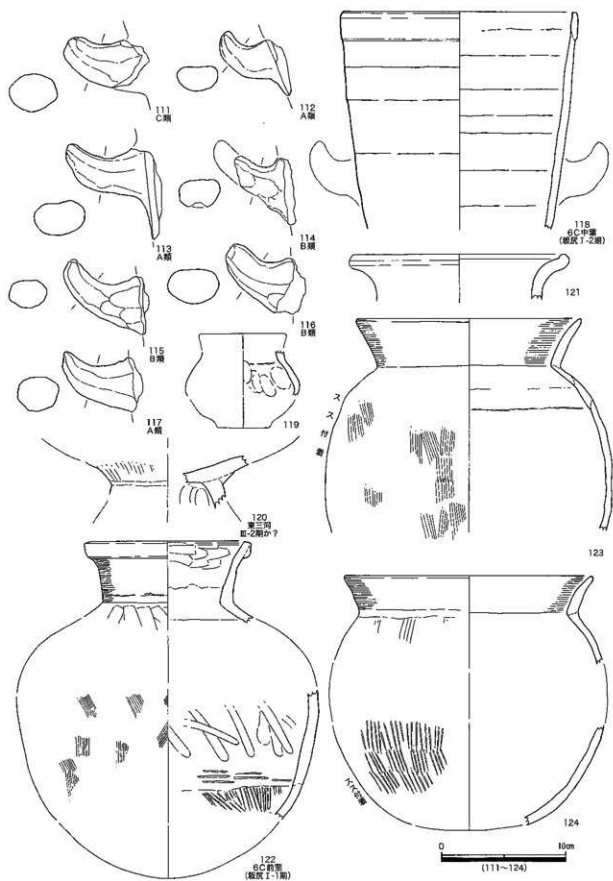


第39図 第96次調査区 出土遺物 実測図 1



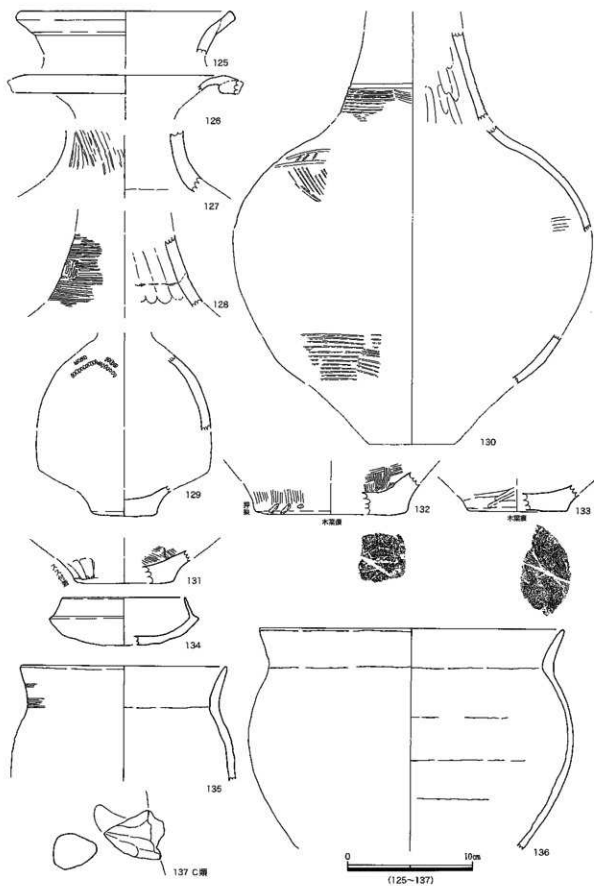
89~110=SB35

第40図 第96次調査区 出土遺物 実測図2

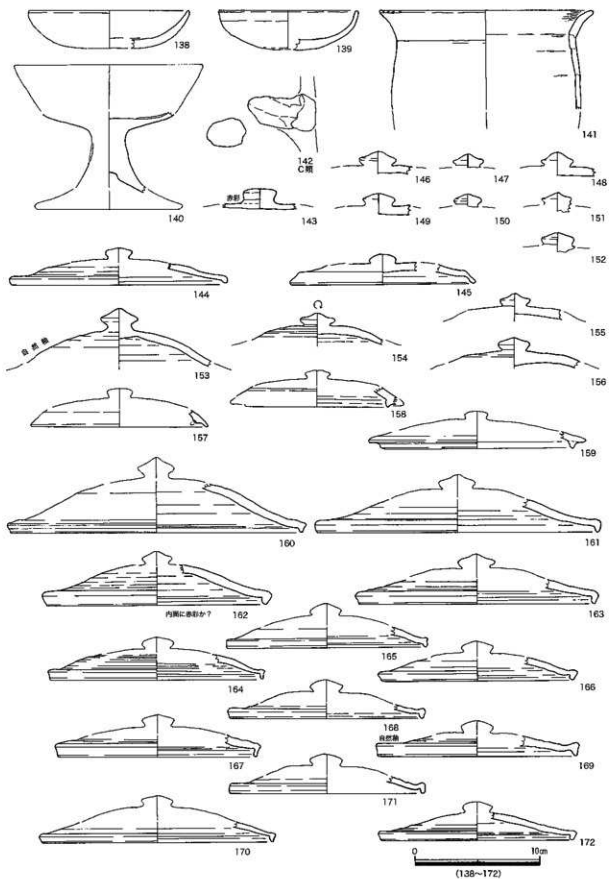


111~118・120~124=SB35
119=SZ16

第41図 第96次調査区 出土遺物 実測図3

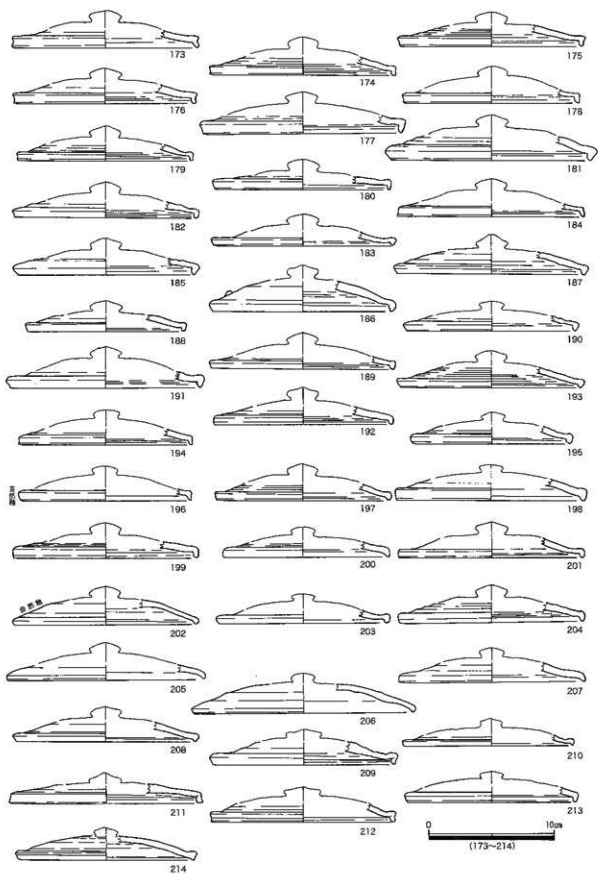


第42図 第97・101・102・104・105・106次調査区 出土遺物 実測図 1



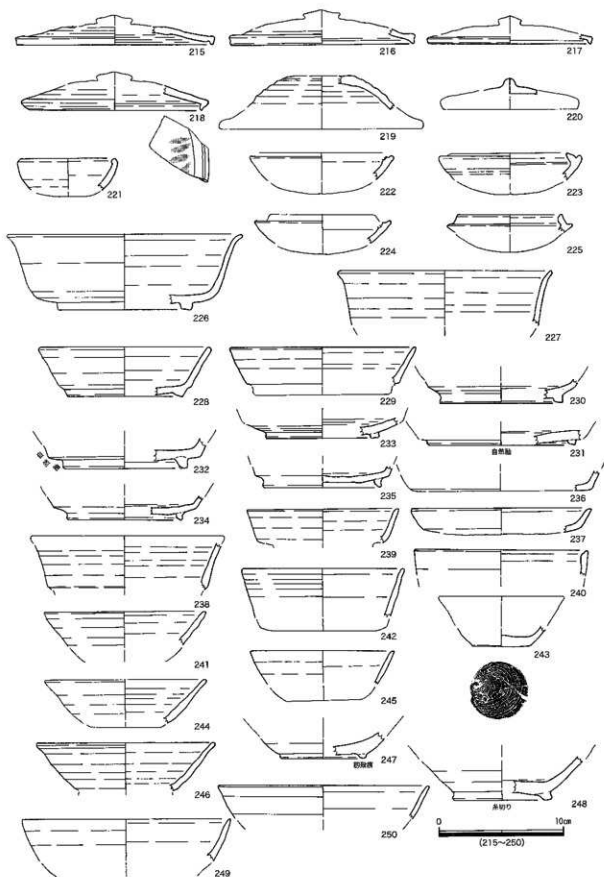
138~142=SB52
143~172=SB51

第43図 第97・101・102・104・105・106次調査区 出土遺物 実測図2



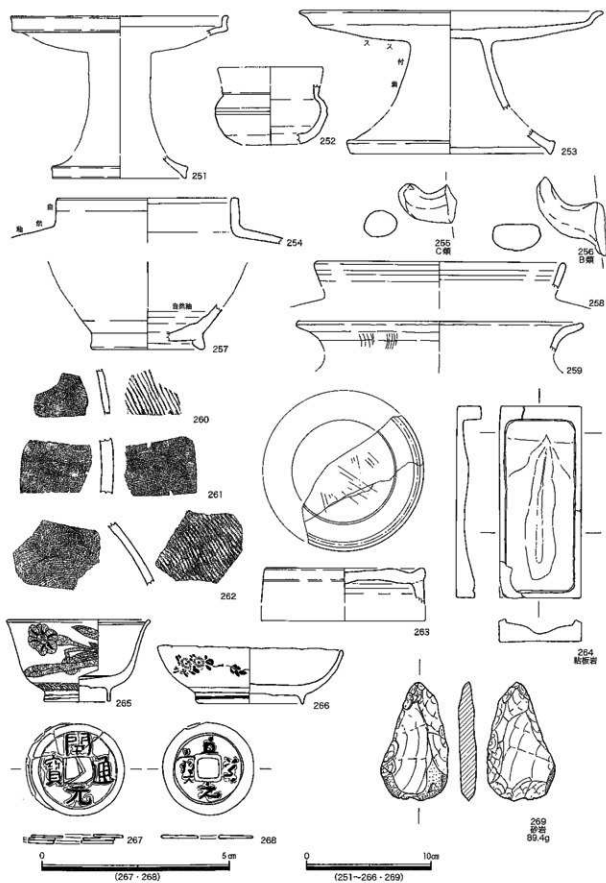
173~206=SB51
209~214=SK68

第44図 第97・101・102・104・105・106次調査区 出土遺物 実測図3



215~218・236・239=SK68
219~237・240~250=SB51

第45図 第97・101・102・104・105・106次調査区 出土遺物 実測図4



251 ~ 263 = S851

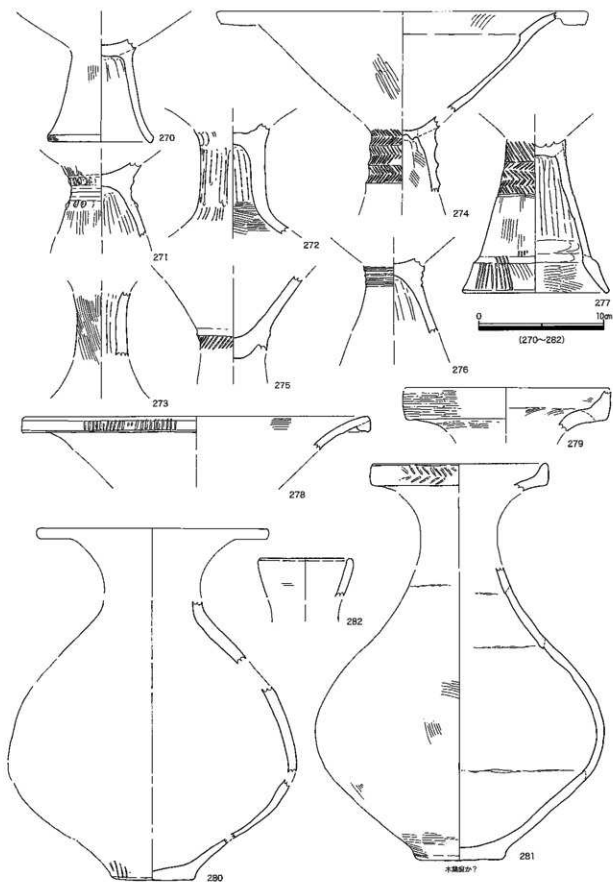
264 = SX1

265, 266 = SH8

267, 268 = Pt

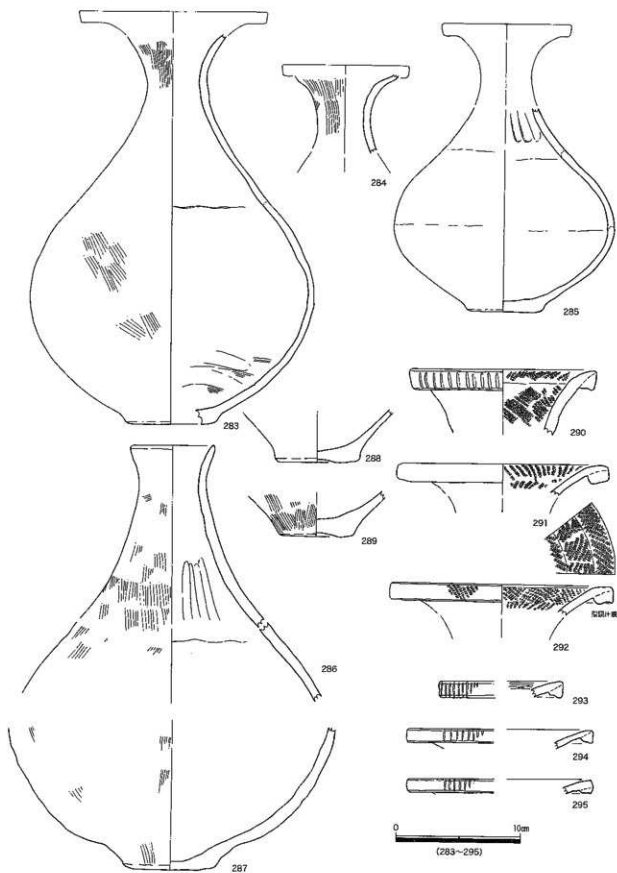
269 = SZ19

第46図 第97・101・102・104・105・106次調査区 出土遺物 実測図5



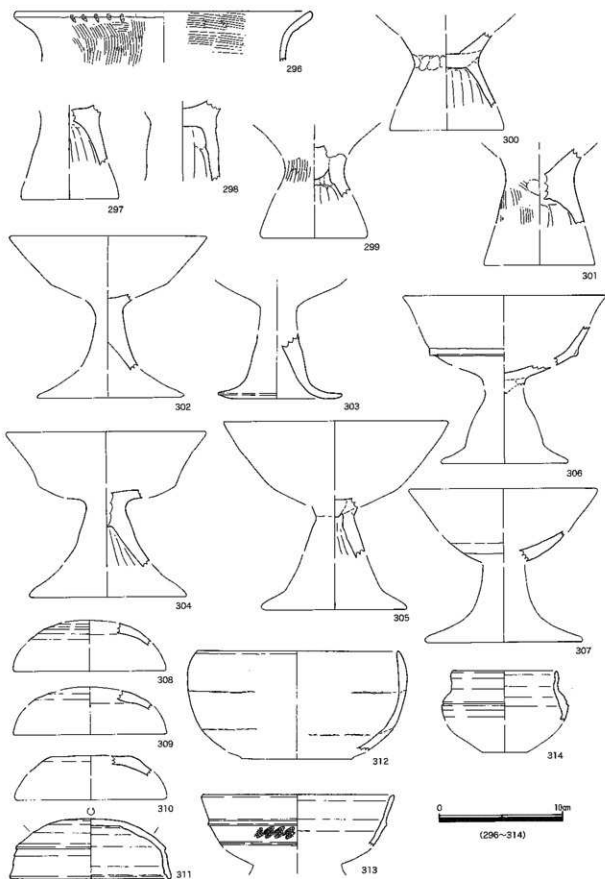
270~273・279~282=SZB
274~278=SZ24

第47図 第98次調査区 出土遺物 実測図 1



283~290=S28
291~295=S24

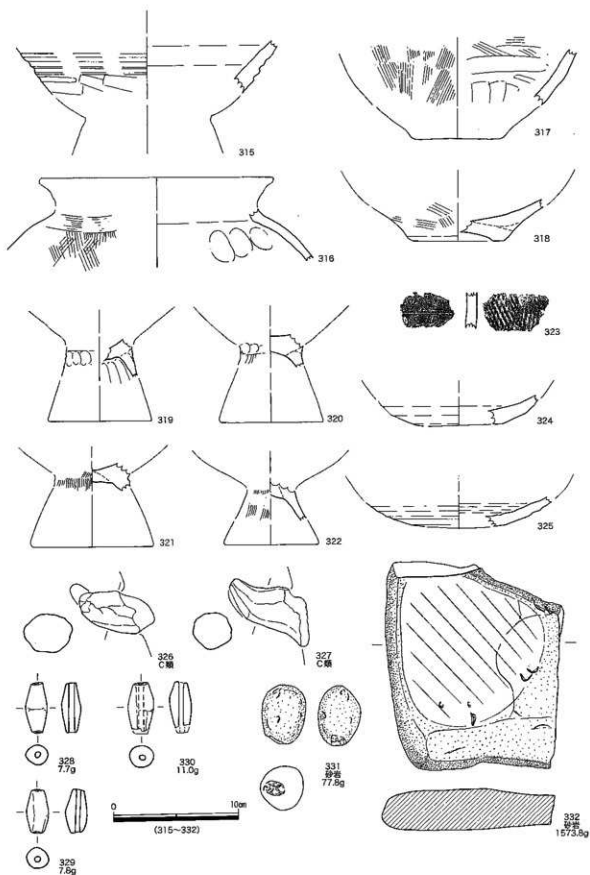
第48図 第98次調査区 出土遺物 実測図2



296~298=528
299~301=5224
302~304・308・309・313=5539

305~307・310・311・314=5840
312=5838

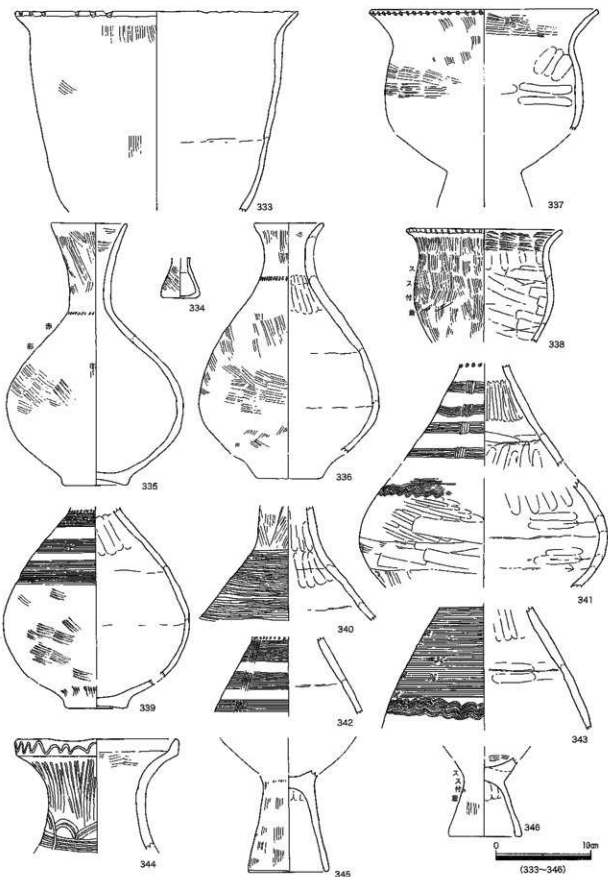
第49図 第98次調査区 出土遺物 実測図3



315・316・319・320・324・326・327=5839
317・323・328・329=5838
318・321・322・325・330=5840

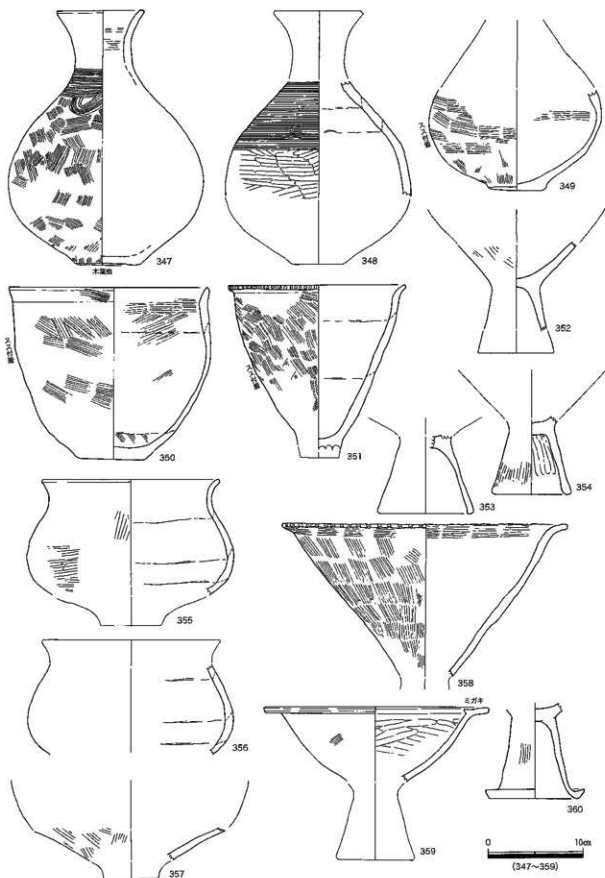
331=包金釧
332=砂金

第50図 第98次調査区 出土遺物 実測図4



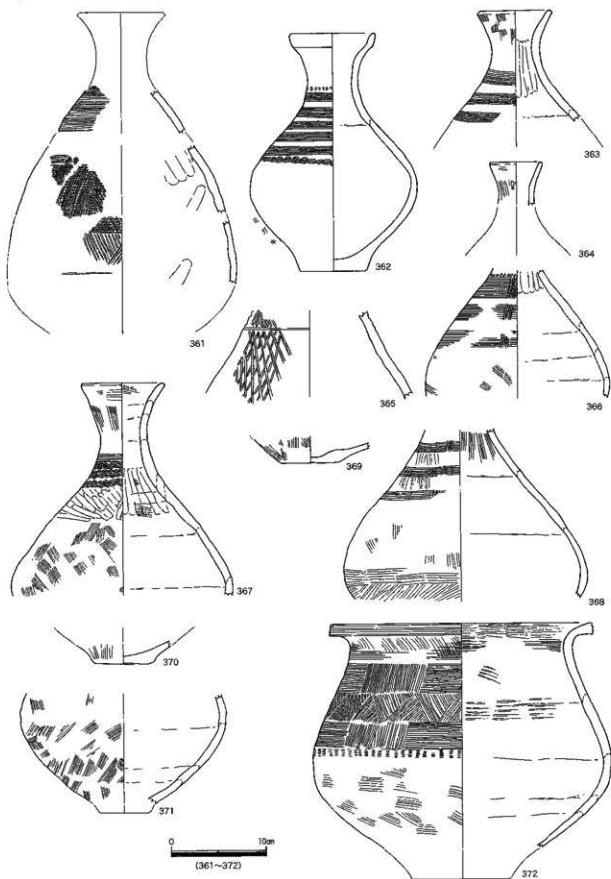
333=SB42
 334=335=SB43
 336~345=SB45
 346=SB49

第51図 第100次調査区 出土遺物 実測図 1



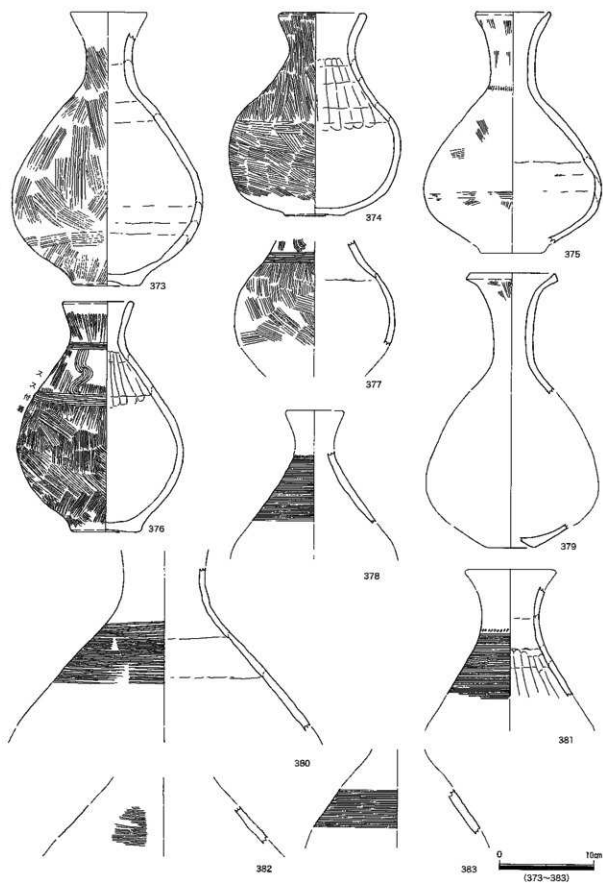
347 ~ 357 = S225
358 ~ 360 = S227

第52図 第100次調査区 出土遺物 実測図2



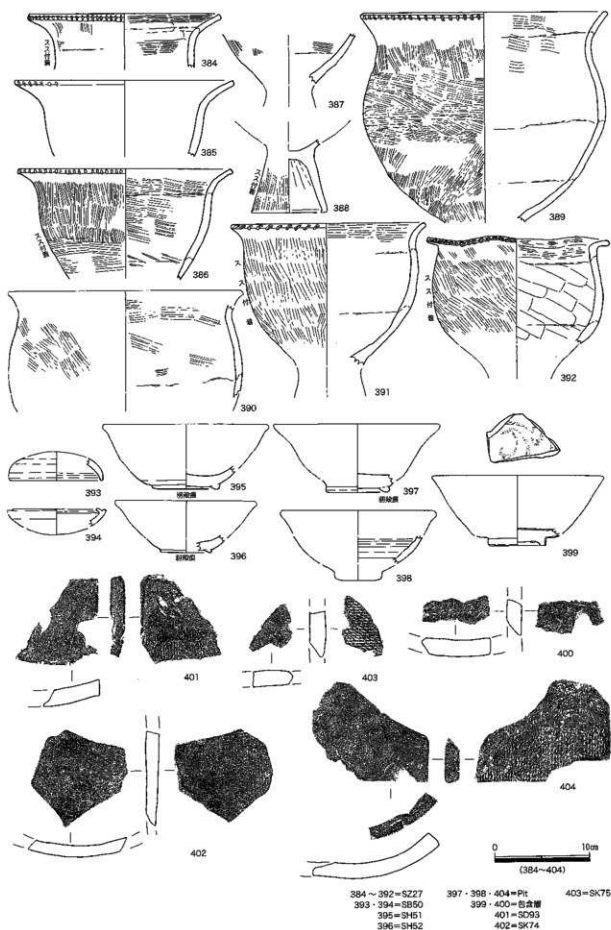
第53図 第100次調査区 出土遺物 実測図3

361 ~ 372 = SZ27



第54図 第100次調査区 出土遺物 実測図4

373 ~ 383 = S227



第55図 第100次調査区 出土遺物 実測図5

第3章 まとめにかえて

第1節 平成23～25年度調査成果

掛之上遺跡の調査は、袋井駅前第二土地区画整理事業に伴うもので、平成11年度から行われてきた。調査地区は102地点と区画整理事業の進捗にあわせて細分化された。街路築造に伴う事前調査を中心に、地下の埋蔵文化財を現地保存できない開発を予定している宅地部分も調査を実施した。今回報告する地点も含め、弥生時代中期及び後期の集落や古墳時代後期の集落のあり方とともに奈良時代の地方行政の末端税収収納施設について多くの情報を得ることができたことは大変大きな成果といえる。

第95・99・103次調査区では、第1次調査区南東側に広がる弥生中期から後期にかけての集落と墓域を確認出来た。第55次調査区からのびる周溝基群は、第1次調査区の周溝基群との間に居住域を挟み、その主軸を45°程東に振り、今回の調査区より南側の第9・22・25・55調査区などで発見された中期の周溝基群の一部と見られる。また、第7次調査区報告の時点で問題となった集落を囲む環濠の有無であるが、第22・55次調査区で発見された溝状遺構（SX1-26次）を環濠の一部とする環濠集落と考えることも出来なくもないが、第33・77・84次調査区（県道袋井小笠線高尾掛之上交差点付近）の明らかに非環濠の集落（住居数は北側集落より圧倒的に多い）が発見されているので、後期前半段階で環濠集落化した鶴松遺跡や伊場遺跡の状況から、太田川東岸周辺でも天竜川西岸地域からの政治的な緊張関係の影響を受けて環濠集落が成立していった可能性を指摘されているが、掛之上の集落はその流れに乗っていないのはたしかであるので、掛之上集落の性格を知る上で非環濠集落であることが一つのキーワードと見られる。古墳時代の様相を見ると、後期の集落は第1・7次調査区で確認された柵に囲まれた後期店館と主軸を同じくする竪穴住居（SB12・14・18）が見られることから、第2・17調査区で確認された居住域がさらに北東方向へ広がるのを再確認した。谷を挟んで東側の第96次調査区付近は住居の重複が激しいが、当地区では住居どうしの間隔があることから、谷の東西で規制の違いがあった可能性が高い。

奈良期については、第22・47・53次調査で確認された総柱の掘立柱建物群を囲む北区画溝の北側で唯一の2×3間で西側に1間の庇を持つ建物（SH19）が確認されるが、この倉庫群（以下「正倉院」）とは主軸が異なる。この正倉院北側は東側には多くの建物が確認されている状況とは異なり、このSH19のみとなることから、なんらかの規制があったと想像される。

第63次調査区に確認された大型掘立柱建物群を囲む西側区画溝と、屋敷地か畑地かは明らかとなっていないが、近世の方形区画を確認できた。この方形区画中央には隅丸長方形の土坑（SK91・92・93）が確認されるが、出土遺物は少なく方形区画の性格を決定することはできなかった。

第96・97・101・102・104・105・106次調査区では、遺跡北東側の隅という立地にも左右されず多くの遺構が確認された。この地区は弥生中期の墓域となることから始まる。その後、特定の箇所に住居が重複して建てられている状況が見られるが、崖近くまで集落は広がることはなく、第33・77・84次調査区（県道袋井小笠線高尾掛之上交差点付近）の住居群（南ムラ）からも若干の間があり、第95・99・103次調査区の住居群（北ムラ）より竪穴住居の棟数は若干多く重複している。北ムラと南ムラとは血縁関係で別のグループとも推定できなくもない。古墳時代を見ると、第75・96次調査区には前期の墓域から一転し、後期に入り居住域となる。西側の谷の上場線に沿って住居が並び、掛之上遺跡全体を見てもこの地区の住居の重複率は圧倒的である。この場所から南側の第60・79次調査区までの範囲を一つのグループ（東ムラ）として扱うことは可能と考えられる。また、奈

良期には正倉院北東方向の施設として掘立柱建物（SH49）と竪穴住居（SB51）の2棟が確認された。SH49は未調査域に及ぶため全体像が不明であるが、円面硯と墨書土器（SK68出土）の出土があった。しかし、周辺からは他に同時期の遺構・遺物は確認できないので、その性格を明らかにすることはできなかった。この地区での中近世の遺構は区画溝ばかりで、第102調査区及び第106調査区で確認された東西方向のやや蛇行する溝は「掛之上」と「掛之下」の字境の区画溝と見られ、第106次調査区付近に江戸期の陣屋があったとの伝承が地域住民に伝えているが、それを直接物語る遺構は確認出来なかった。しかし、遺跡北東隅で発見されたSX1-106次は地下室状遺構であるので、関連性を推定できなくもないが詳細は不明である。

第98・100次調査区では、北側の第45・62・73次調査区で確認された弥生中期の墓域がおよんでおり、南側では別のグループ（第85次調査区付近）となる周溝墓群が確認できた。これら周溝墓群は第33・77・84次調査区（県道袋井小笠線高尾掛之上交差点付近）の住居群（南ムラ）の北側と東側に立地しており、ムラの周囲に墓というロケーションを持っていたと見られる。この調査区のある遺跡南東側は古墳時代後期に東ムラの一部となる。奈良期には3×5間で南北棟のSH12の他、3棟以上の掘立柱建物が見つかる場所、このSH12の北側土坑などから一枚作りの平瓦（8C前半）が出土する。1棟の建物の屋根を覆うほどではなく、数少なく細片での出土のため詳細は不明である。このSH12は建て替えの痕跡があって、止倉院の東側でこの場所に建物が必ず必要であったことを説明している。また、第100次調査区北側の第72調査区からは12C前半期～13C中葉の山茶碗（渚美・湖西産等）を中心に青磁碗など貿易陶磁器の出土があり、この付近が鎌倉期に屋敷地となった見られる。同時の屋敷地は第33・77・84次調査区（県道袋井小笠線高尾掛之上交差点付近）及び第30・71・80次調査区でも確認されており、掛之上遺跡の南東側に集中している。室町期には第96・97・101・102・104・105・106次調査区のある北側へ広がるが、掛之上遺跡全体に広がるのは室町末期になってからである。掛之上遺跡付近には丸尾氏館の伝承地がある。天正二年（1574）の『遺書物語』には「丸尾和泉守末葉高部郷七郎左衛門」と記録があるという。また、武田家から天正二年七月九日付けで「かけの上之屋敷宅間 門屋敷共二」を含む山名郡内などの所領二三八貫文の安堵状が本間八郎三郎へ出されている。これは武田勝頼による高天神城攻略の結果として、袋井南部地域を手中に収めたことを示しており、法多山一乗院（尊永寺）にも七月九日付けの寺領安堵状が残されている。本間氏の末裔方が所蔵する系図には室町期初期に足利尊氏に従い、山名郡を与えられ、高部郷欠ノ上の屋敷に居住したとも記され、室町後期には第89・93次調査区に見られる屋敷地と考えられるが、掛之上遺跡南東側で確認された鎌倉期、室町末期の二時期の屋敷の主は、本間氏一族か連なる人物とも推定される。また、3,100石の旗本渡辺恒綱の陣屋は第6次調査区の江戸前期から明治期の屋敷地区画と推定できる。後世削平によって建物配置は不明であるが、少なくとも長屋門、玄関、書院等の役所と渡辺氏の住まいである役宅、土蔵等が立ち並んでいたと見られる。

第2節 調査成果からみた掛之上遺跡

掛之上遺跡はこれまでの調査の成果から、地方官衙であることが明らかになったと説明してきた。しかし、遺跡の立地条件からか木簡の出土はなく、総柱の倉庫群と管理施設と見られる掘立柱建物は確認されるも、郡庁など主要施設が発見されていない。中央に端を発した文書行政が地方にまで浸透していたことは、坂尻遺跡から銅印や木簡・墨書土器等の出土があることから明らかにでき、地方行政の施設であれば、その遺跡からは文房四宝のいずれかが出土する。文書行政を示す遺物としては行政文書そのものである木簡の他に、筆記用具としての筆や墨・硯が挙げられ、識字層が役人で

あったと考えられる古代において、関係品が出土することは、その地で文書作成の実務が行われていたことを示すはずであるが、掛之上遺跡ではほとんど見られない。特殊な建物遺構・配列は確認できたが、執務の実像を追えないのである。遺跡全体の六割近くの調査が終了し、未調査域の中に郡庁や郡司館が存在する余地は無いと見られる。遺跡中央部で四方を溝に囲まれた方形の区画の中に「ロ」の字状に並ぶ3間×4間のSH1・2・6（第6次調査区）・6（第28次調査区）・9・13・15と、3間×11間のSH5を総柱の掘立柱建物であることから税収納施設と見ると、田租や公出挙の穀類を収納する官衙施設である「正倉」（『出雲国風土記』意宇郡山国郷・含人郷・山代郷・拝志郷条）が近似するものと思われる。当時、郡衙の一角に置かれた正倉院のほか、郡衙とは別の場所に正倉別院が設けられる場合があったようであり、島根県山代郷正倉跡（団原遺跡）等とも状況は酷似している。

正倉別院や郡衙正倉院に関するこれまでの研究により施設内建物は「倉」と「屋」の使い分けがされており、「倉」は総柱建築構造の高床倉庫で、「屋」はほとんどが側柱建物構造で無庇の土間ないしは平地床の倉庫であることが知られている。つまり、総柱で3間×4間の掘立柱建物7棟とSH5は「倉」で、上間式掘立柱建物SH3・4・17及び西側のSH1・2・4・5の7棟が「屋」となると見られる。また、建物の構造から、礎石建物か掘立柱建物も意識して記録（伊豆国正税帳）が残る。壁の構造も読み取ることができ、「甲倉」「丸木倉」「板倉」など用語も見られ、格納物で使い分けされている。掛之上遺跡に当てはめると、3×4間の7棟は板倉で不動穀倉か頼稲倉、SH5は法倉と呼ばれる動用穀倉になるであろう。東側のSH3・4・17や西側のSH1・2・4・5は頼稲屋であろう。「動用倉と不動倉」から「出挙用の頼屋」へ変化（「掛之上遺跡14・15・19」）したことは、当時の税収状況に大きな変化があったと想像できる。安田喜憲氏がまとめた「屋久杉の年輪の炭素同位体比から推定した気候変動と畿内の自然災害の出現率（『文明の環境史観』2004中公叢書・『気候変動の文明史』2004 NTT選書）」を見ると、八世紀中ごろから急な温暖化がみられ、九世紀には1～2℃の上昇している。それにともなって旱害率が上昇し、すこし遅れて風水害率が上昇する。旱害は夏の日照り、風水害は梅雨前線活動・秋の台風活動が主にたたらすので、時期差が生じる。また、被害を受ける農地と河川流域の低湿地との違いもあると見られる。大まかには温暖化によってこれらの発生頻度が増加した時期であることは間違いないので、それが影響したとも見られる。延暦十四年（795）閏七月十五日の太政官符（『類聚三格』）によって郷ごとに正倉院（郷倉）を設置を命ずるが、同年九月十七日の太政官符によって、数郷ごとに正倉院を置くことへ変更されている。また、他の例を見ると、八世紀後半ころには掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられているようであり、掛之上遺跡のⅠ期からⅡ期へ正倉の建物構造の変更については詳細な検討が必要である。

律令制の根幹は、戸籍・計帳によって人々を把握し、課税の対象とする人別支配であった。八世紀後期ごろから、課税から逃れるため偽籍・逃亡・浮浪が次第に顕著となる。これは、現代人がイメージする「奈良時代＝天災」と絡み合い、だから聖武天皇は東大寺や人仏、国分寺を建立したという流れを嚆矢にしているが、100年間というスケールで奈良時代を考えると、天災の被害を受けていたのは、多いところでも20年ほどで、天災を過大評価し過ぎているのではないであろうか、当時の生活を改めて見てみると、貴族階級を一層富裕にして奢侈的な唐様食を取り入れることに熱心になっているが、庶民階級は貧窮生活者が多く、食生活も粗食であったとして、奈良文化財研究所が復元した庶民の食事は、一食わずか407kcal。朝と晩の一日二食が原則だったので、一日の栄養摂取量は、1,000kcalにも満たないと推定している。そこで、米以外の食材について古文書を見ると、海の幸、山の幸が盛りだくさんで、近くの川で鮎などの川魚が、山には猪や鹿とともに山菜や果物、海には魚や貝、海藻などが無尽蔵とも言えるほどの量があったことは疑う余地はない。もちろん、主食は米と

見られるが、米だけを食べていたのではない。農民＝稲作と考える人が多いが、古代の農民は、田ばかりではなく、畑を耕し、山菜や木の実を採り、魚や動物を捕まえていた。稲作ばかりに目を向けると、奈良時代の農民は実態よりも貧しく見えるが、狩猟と採集という、縄文時代以前からの生活スタイルを見直すことで、より自然な農民の暮らしが浮かび上がってくる。しかし、農民に課せられた税負担は、半端なものではなく、一般良民も、とにかく律令制度そのものから逃げ出さざるを得ないほど、生活がつかうと理解した方が適当であろう。

律令制度下の正丁（21～60才までの男性）は、当時の代表的税である稲で払う租や、布などで払う調の他に、年間六十日以下の労役があり、三人に一人の割合で徴兵され、最低一～三年は帰ることができなかった。防人として、派遣される場合はその旅費も全て自分持ちとなることは知られている。こうした苛酷な状況から、奴婢も良民も、戸政からの解放を求めて、中世の寺内町のような市販の雑踏に紛れ込んだり、山へ入ったり、政治の手の届かない僻地へと逃げる者は後を絶たなかった。結局その一般民衆のおびただしい浮逃が、律令制度を崩壊させる一番の原因となったのは間違いない。

畿内先進地域の奴婢所有戸では、平均して戸口総数の25%が浮浪、逃亡により戸外に流出しているのである。このうち、良民の浮逃率は20%であるのに対し、奴婢の場合は40%に達している（神野清一著「律令国家と賤民」1986吉川弘文館）。一方、律令制度を崩壊させるほどの、大量の人々の逃亡は、その受け入れ先がなくては説明がつかない。一体どこに大量の人々を吸収できる場があったのだろうか。浮逃先が判明して捕らえられた例も見られるが、それはわずかで、記録には東大寺に寄進された奴婢の例などそれほど残っていない。浮逃した人々が、別の地域の良民（奴婢でない一般民衆）の集落に紛れ込むにしても、その数は多すぎるので、どこかに浮逃先があったはずである。そうでなければ、これほど大量の人々の浮逃は説明できない。考えられるは、朝廷の支配下となっておらず、朝廷に従属することを拒む者として圧迫されていた人々であろう。当時の朝廷の支配は畿内を中心とした以外と狭い範囲で、これまで単純に朝廷の支配は全国に及ぶと考えられてはいるが、地方へ行けば、それは点と点を結ぶ線ではなく、面的な支配には至っていなかったことは明らかである。

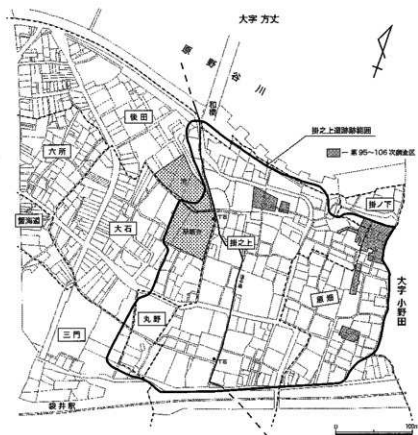
九世紀ごろから関東地方を中心として、富豪層による運京途中の税の強奪など、群盗行為が横行し始めていた（貞観の浮囚反乱・寛平・延喜東国の乱・醍醐の党）。群盗の活動は九世紀を通じて活発化していき、朝廷は群盗鎮圧のために東国などへ軍事を得意とする貴族層を国司として派遣するとともに、従前の軍国制に代えて国衛に軍事力の運用権限を担わせる政策をとっていった。この政策が結実したのが九世紀末から十世紀初頭の寛平・延喜期であり、この時期の勲功者が武士の初期原型となった。彼らは自らもまた名田経営を請け負う富豪として、また、富豪と受領の随執の調停者として地方に勢力を扶植していったが、彼ら同士の対立や受領に対する不平が叛乱へ発展したのが、忠平執政期の940年前後に発生した承平大慶の乱である。朝廷の側に立ち、反乱側に立った自らと同じ原初の武士達を倒して同乱の鎮圧に勲功のあった者の家系は、承平大慶勲功者、すなわち正当なる武芸の家系と認識された。当時、成立した国衛軍制において、「武芸の家系」は国衛軍制を編成する軍事力として国衛に認識され、このように国衛によって公認された者が武士へと成長していったとみられる。

平安中期のはじめごろ、朝廷は人別支配を放擲し、土地課税を基調とした支配へと移行し、それに伴って、地方に土着した貴族や郡司らに出自する富豪層は、国衛から名田経営と租税収取を請け負う田堵負へ成長し、より一層経済力をつけていった。富豪層と一般百姓層の格差はますます増大し、一般百姓は次第に富豪の支配下に組み込まれていった。しかし、平安時代後半は寒冷化が進み、それにとともに農作物の収穫量が減ったこととともなって、富の寡黙が横行し、白宮のために武装化した

集団が各地で衝突を繰り返し、戦乱の時代へと移る。かなり寒冷化したと思われる14世紀頃に生まれた文学は、吉田兼好の徒然草や太平記ぐらいであり、さらに絵画では枯淡な山水画の完成が見られるぐらいで草やかさに欠けているとの指摘もある。掛之上遺跡からは、この平安期を如実に物語る遺構遺物は多くない。遺跡南西側で鎌倉時代の屋敷地と見られる区画の登場まで空白期間が見られる。しかし、館の主についての記録は無く、その後の当地の動向については古記録からも見ることは難しく、建武元年（1334）には尾張朝直が高部郷の惣領職の安堵される記録まで待たなくてはならない。

想像の域は出ないが、応永三年（1396）六月十五日付けや同年十月二十日付けの今川了俊書下を見ると、本間氏が高部郷を領有したと見られ、時代は下るが、元亀二年（1571）三月十三日付け徳川家康判物写に記されているとおり、掛之上に屋敷を構えていたことは明らかで、室町末期の屋敷地区画のいずれかが本間屋敷であろう。また、興味深い資料として、天文十年（1541）年二月十三日付け今川義元判物写には、白山美濃馬場（長滝寺）と関係を持つ法多山が高部郷内に寺領を持ち、永禄十二年（1569）十二月吉日付け長滝寺経聞坊の良雄が持つ高部郷の霞場権利の譲状が出された記録が残されている。白山衆（長滝寺）は地域の有力者の屋敷や関係の寺院を拠点として布教活動を行うため、本間屋敷を拠点として利用した可能性は高い。

掛之上のみを記述することは困難なため、掛之上を含む高部村全体についてふれたい。高部村は近世初頭に掛川藩領となり、正保二年（1645）からは横須賀藩領、天和二年（1682）幕府領、元禄十一年（1698）以降は旗本渡辺氏領となる。村高は、慶長九年（1604）の検地では1,126石余、反別103町2反余、「元禄高帳」では1,219石余、「天保郷帳」1,262石余、「旧高旧領」1,264石余。元禄五年（1692）の田方948石余・畑方244石余、袋井宿・下諸井村より入作高227石余、赤尾村・



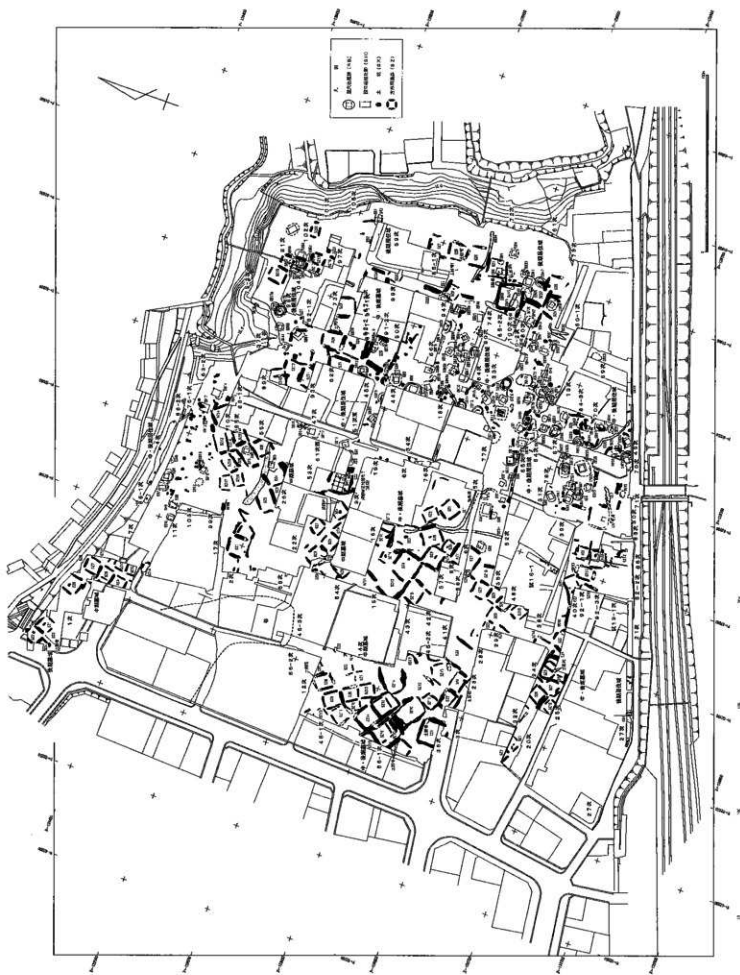
第56図 区画整理事業実施前の地積図と字名

西田村へ出作109石余(丸尾家文書)。助郷は寛永十四年(1637)より東海道袋井宿へ出役(丸尾家文書)。山名郡上貫名・下貫名・袋井三箇村の東海道往還掃除山役(東海道宿村大概帳)。元禄五年(1692)の村指出帳(丸尾家文書)では、戸数106・人口838、医師12・坊主13・鍛冶11・桶師2・木挽8・馬40(御役馬20・耕作馬20)、文政十一年(1828)の宗門人別改帳(丸尾家文書)では、戸数167・人口744・医師1・社人2・百姓106・借地百姓20・水呑38で、東組・西組・中組の三組に分かれていた。『遠淡海地志』によれば戸数400で、小地名に三門・大門・下地があり、慈眼寺が遠江三十三観音の七希礼所であることが見え、権才船渡がある。寺院は曹洞宗慈眼寺・同宗満願寺・同宗護国寺・同宗了了寺・同宗神宮寺。神社は六所大明神・王子権現社がある。元禄九年(1692)の村指出帳によれば、用水は村の東北より西南を流れる原野谷川および菩提沢川より取水。米のほかには麦・木綿・アワ・ヒエ・キビ・大豆・小豆・ササゲ・ゴマ・ソバ・大根・カツマリ菜・ナスビなどを栽培した。田畑の肥料には糞・ゲスコテ・アブラカスなどを使用。蛸・草刈は村内のほか石野村に人会、年貢米は郷蔵より馬で川端まで8町ほど運び、川船にて福田湊まで津出ししていた。安政元年(1854)の大地震では、全壊家屋133・半壊10・大破焼失12の被害をうけ、米147俵余の救助米を下付された。明治元年駿府藩領(同2年静岡藩と改称)、同4年静岡県を経て、同年11月浜松県に所属となった。

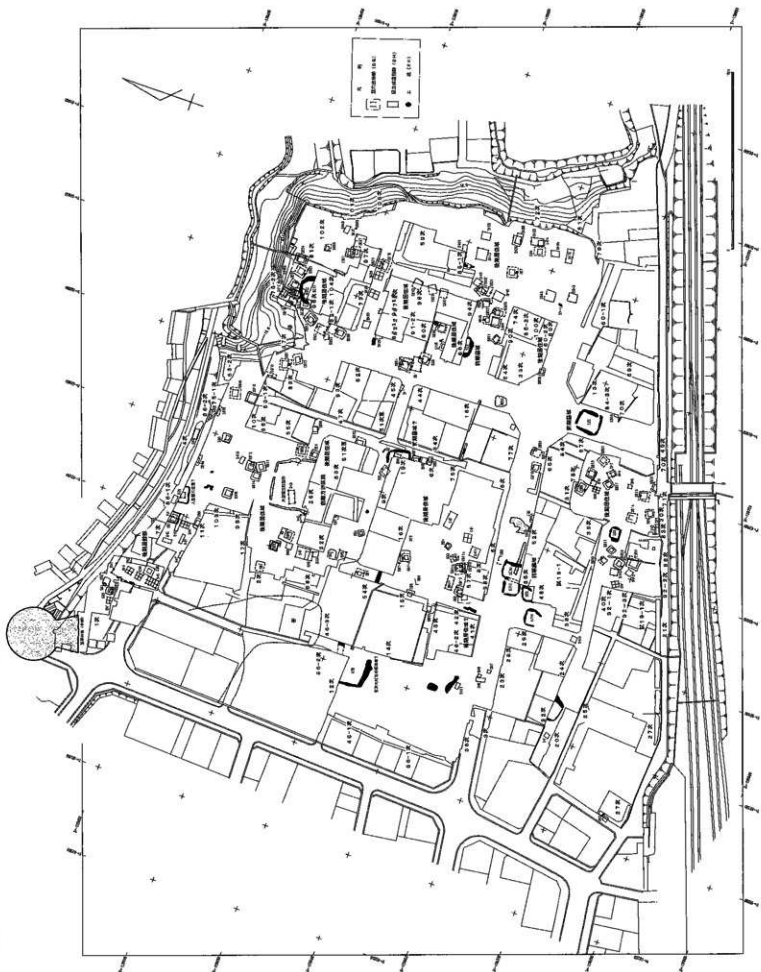
最後、本書をまとめるにあたり、調査にご協力いただいた掛之上地区住民の方々を含めた各位、また、調査にご理解とご協力をいただき、円滑な調整をして頂いた、袋井市都市建設部都市計画課の各位に改めて御礼申し上げます。

参考文献

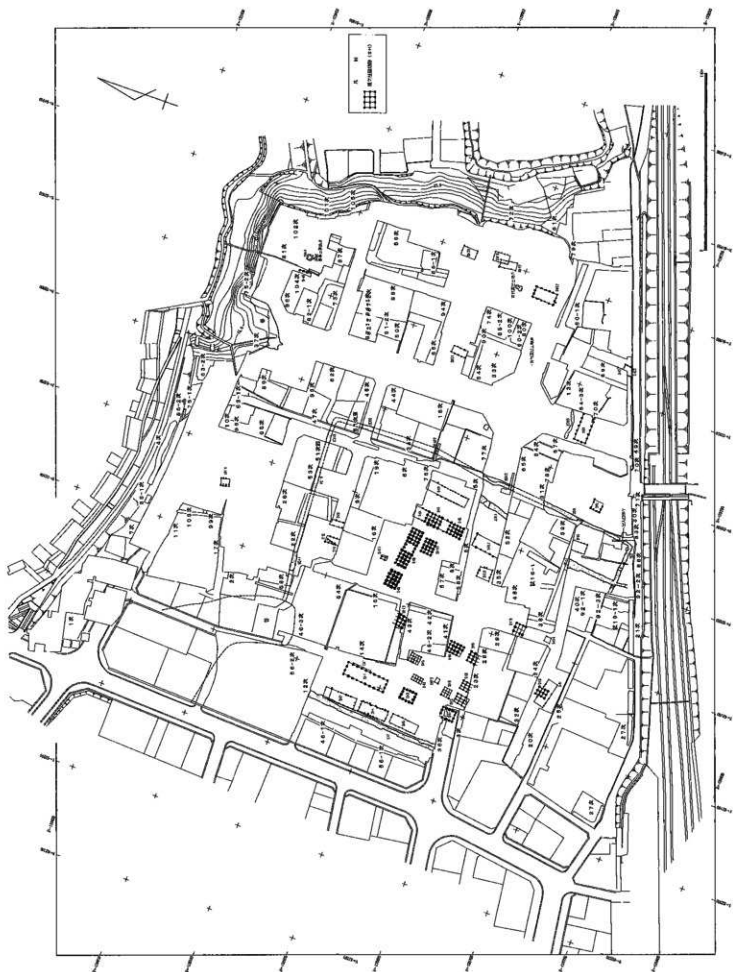
- 磐田郡教育会 1971 『静岡県磐田郡誌』 名著出版
 袋井市教育委員会 1974 『狐塚遺跡発掘調査概報』
 袋井市地誌調査委員会 1976 『狐塚』(内部報告)
 袋井市教育委員会 1983 『大門遺跡 大門1遺跡第2次発掘調査報告書』
 袋井市教育委員会 1983 『掛之上遺跡Ⅱ 袋井市掛之上遺跡第2次発掘調査報告書』
 袋井市 1983 『袋井市史』 通史版
 袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳 昭和61年度基礎資料収集調査報告書』
 袋井市教育委員会 1988 『大門遺跡 袋井市大門遺跡第4次発掘調査報告書』
 袋井市教育委員会 1990 『大門遺跡Ⅴ 大門1遺跡第5次発掘調査報告書』
 静岡県 1990 『静岡県史』 資料編1 古代1
 静岡県 1994 『静岡県史』 通史編1 原始・古代
 袋井市教育委員会 1995 『掛之上遺跡第3次調査報告』 『大門遺跡Ⅴ 大門1遺跡第2次発掘調査報告書』
 静岡県文化財調査所 1998 『掛之上遺跡 平成9年度二級河川原野谷川社会部地盤重点河川事業(地方特記) 工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 袋井市教育委員会 2000 『掛之上遺跡 平成11年度 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書』
 袋井市教育委員会 2001 『平成12年度 掛之上遺跡Ⅶ 本文編 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書2』
 袋井市教育委員会 2002 『平成13年度 掛之上遺跡Ⅵ・Ⅷ 本文編 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書3』
 袋井市教育委員会 2002 『平成13年度 掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹ 本文編 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書4』
 袋井市教育委員会 2002 『見えてきた昔の掛之上! かけのうえ遺跡 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書5』
 袋井市教育委員会 2002 『平成14年度 掛之上遺跡14・15・19 本文編 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書7』
 袋井市教育委員会 2003 『平成14年度 掛之上遺跡18 本文編 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書8』
 袋井市教育委員会 2012 『平成15・16年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編1 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書31』
 袋井市教育委員会 2012 『平成15・16年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編2 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書32』
 袋井市教育委員会 2013 『平成17・18年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編1 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書33』
 袋井市教育委員会 2013 『平成17・18年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編2 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書34』
 袋井市教育委員会 2013 『平成19・20年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編1 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書35』
 袋井市教育委員会 2014 『平成19・20年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編2 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書36』
 袋井市教育委員会 2014 『平成15～18年度 掛之上遺跡 本文編 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書37』
 袋井市教育委員会 2014 『平成21・22年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編1 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書38』
 袋井市教育委員会 2014 『平成21・22年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編2 袋井市駅前第二地区土地地区面整理事業に伴う発掘調査報告書39』
 袋井市教育委員会 2008 『鶴田1遺跡 市道川井山梨線新設工事に伴う発掘調査報告書』



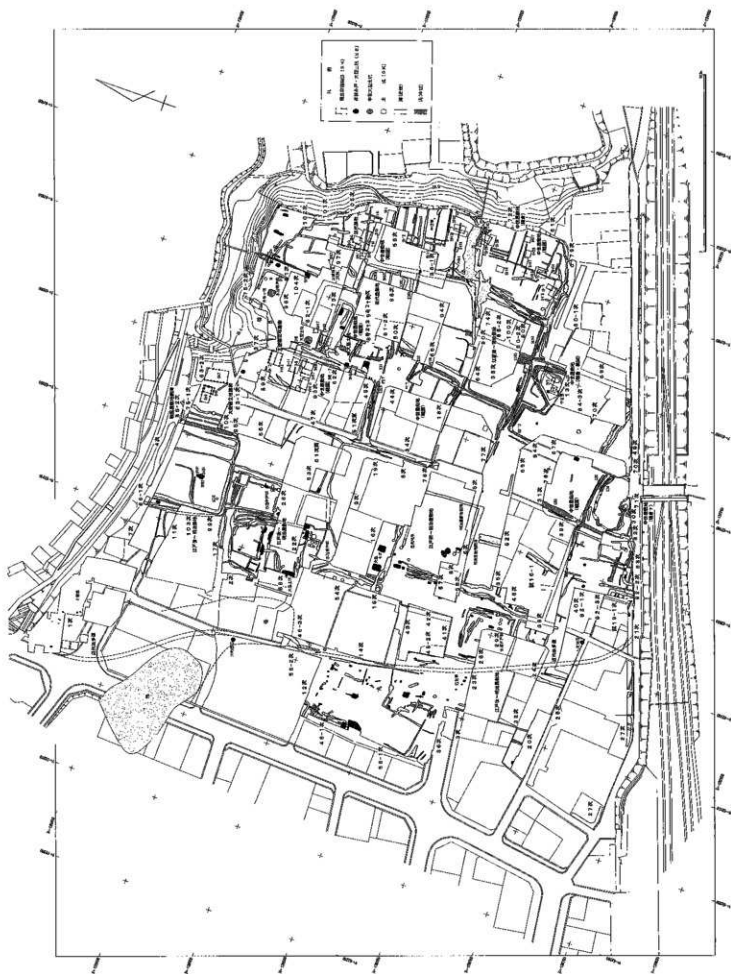
第57図 掛之上遺跡時代別（弥生）分布図



第58図 掛上遺跡時代別（古墳）分布図



第59圖 掛之上遺跡時代別(古代)分布圖



写真図版



1 掛之上遺跡発掘調査区北西側全景（合成写真）

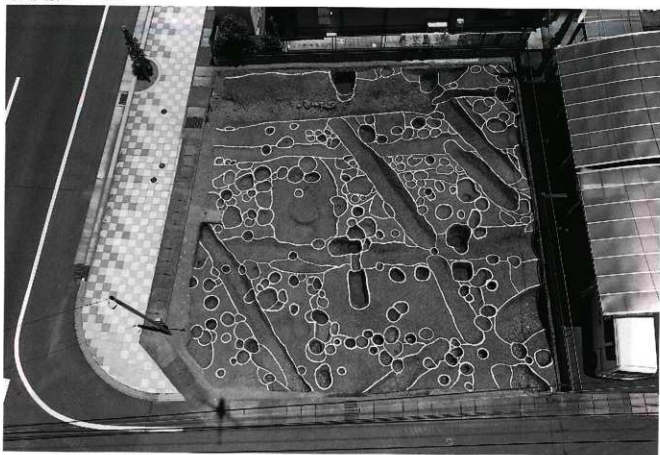
写真図版 2



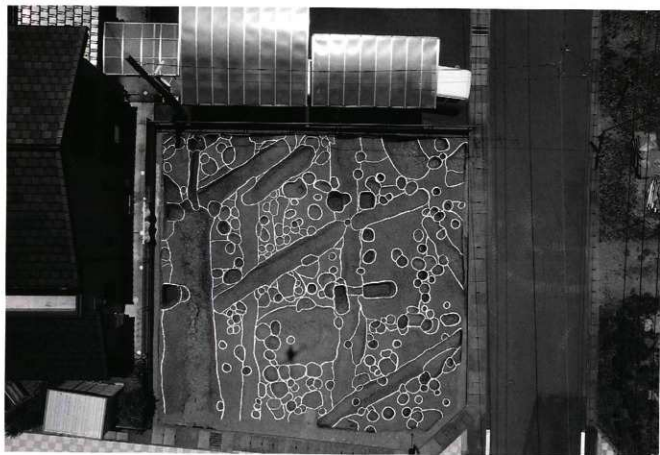
2 拵之上遺跡発掘調査区南西側全景（合成写真）



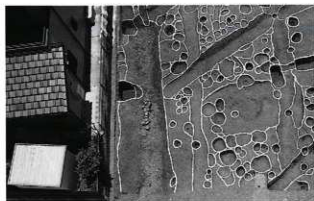
3 掛之上遺跡発掘調査区東側全景（合成写真）



4 第95次発掘調査区全景(西から)



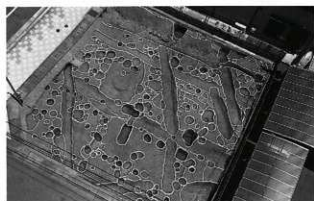
5 第95次発掘調査区全景(真上から)



6 第95次発掘調査区SD7(北から)



7 第95次発掘調査区SD7(北から)



8 第95次発掘調査区SZ13・14(南西から)



9 第95次発掘調査区SZ13(北東から)



10 第95次発掘調査区SZ13南側周溝(北東から)



11 第95次発掘調査区SZ13西側周溝(南から)



12 第95次発掘調査区SZ14南側周溝(南から)



13 第95次発掘調査区SZ14西側周溝(北から)



14 第96次発掘調査区全景(北西から)



15 第96次発掘調査区全景(北上から)



16 第96次発掘調査区SB57a・b(北から)



17 第96次発掘調査区SB57a・b遠景(北から)



18 第96次発掘調査区SB57a遺物出土状況(P117)



19 第96次発掘調査区SB57a遺物出土状況(P122)



20 第96次発掘調査区SZ3(北西から)



21 第96次発掘調査区SZ15南側周溝(北から)



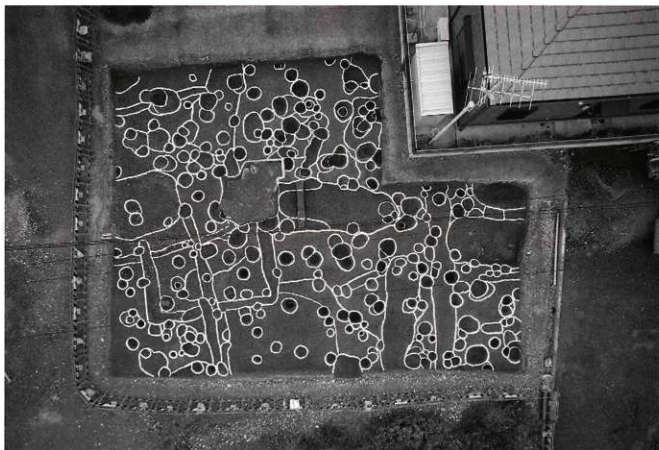
22 第96次発掘調査区SZ7(南西から)



22 第96次発掘調査区SK66(西から)



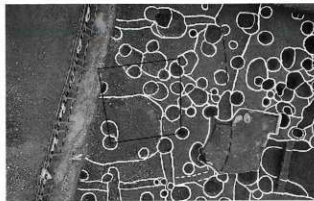
24 第97次発掘調査区全景(北から)



25 第97次発掘調査区全景(真上から)



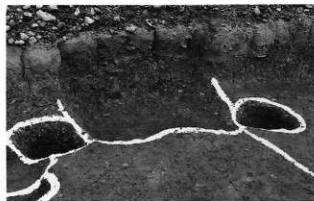
26 第97次発掘調査区SB36(北から)



27 第97次発掘調査区SB37(西から)



28 第97次発掘調査区SB61南側 (南から)



29 第97次発掘調査区SK68(南から)



30 第97次発掘調査区SZ17(東から)



31 第97次発掘調査区SZ18(北から)



32 第97次発掘調査区SZ19(北西から)



33 第97次発掘調査区SZ21(北西から)



34 第98次発掘調査区全景(北から)



35 第98次発掘調査区全景(真上から)



36 第98次発掘調査 東調査区全景(南から)



37 第98次発掘調査区SB38(真上から)



38 第98次発掘調査区SB39(真上から)



39 第98次発掘調査区SB40(真上から)



40 第98次発掘調査区SZ22・40(北から)



41 第98次発掘調査区SZ28遺物出土状態(東から)



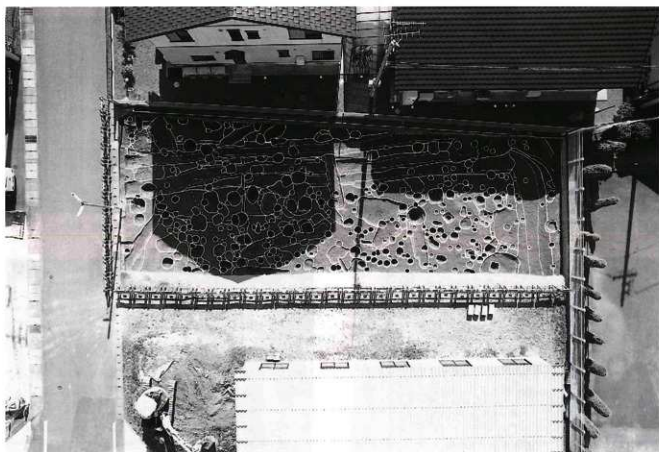
42 第98次発掘調査区SZ23(北から)



43 第98次発掘調査区SZ24(北から)



44 第99次発掘調査区全景(北から)



45 第99次発掘調査区全景(真上から)



46 第99次発掘調査区SB11(西から)



47 第99次発掘調査区SB12(西から)



48 第99次発掘調査区SB14(西から)



49 第99次発掘調査区SH19(北から)



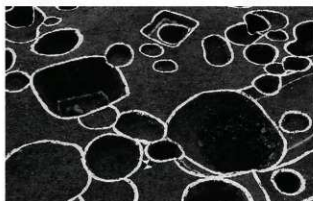
50 第99次発掘調査区SH19(東から)



51 第99次発掘調査区SZ17(東から)



52 第99次発掘調査区SZ18(西から)



53 第99次発掘調査区SK87(西から)



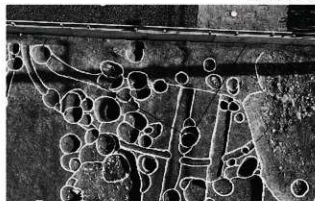
54 第100次発掘調査区全景(北から)



55 第100次発掘調査区全景(真上から)



56 第100次発掘調査区SB41(真上から)



57 第100次発掘調査区SB42(真上から)



58 第100次発掘調査区SB44・48・49(真上から)



59 第100次発掘調査区SB46・47(真上から)



60 第100次発掘調査区SB48(真上から)



61 第100次発掘調査区SB49・SH52(西から)



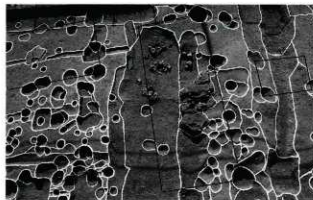
62 第100次発掘調査区SH12北側(真上から)



63 第100次発掘調査区SH12北側(西から)



64 第100次発掘調査区SH50・51・52(南から)



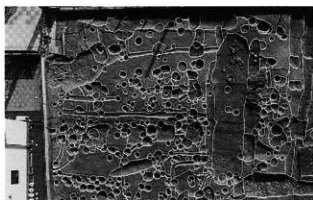
65 第100次発掘調査区SH50・51・52SX1(北から)



66 第100次発掘調査区SZ25(北から)



67 第100次発掘調査区SZ25東周溝遺物出土状況(西から)



68 第100次発掘調査区SZ27(真上から)



69 第100次発掘調査区SZ27西周溝遺物出土状況(真上から)



70 第100次発掘調査区SZ27西周溝遺物出土状況(真上から)



71 第100次発掘調査区SX1(東から)



72 第101次発掘調査区全景(南西から)



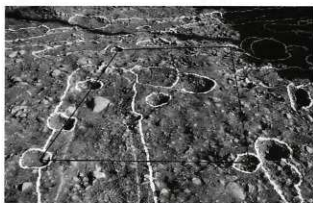
73 第101次発掘調査区全景(真上から)



74 第101次発掘調査区SH20・SZ20(東から)



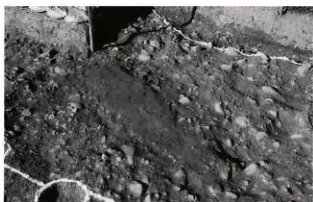
75 第101次発掘調査区SH20・SZ20(西から)



76 第101次発掘調査区SH20(西から)



77 第101次発掘調査区SH20(南から)



78 第101次発掘調査区SH48屋外「マ」(南東から)



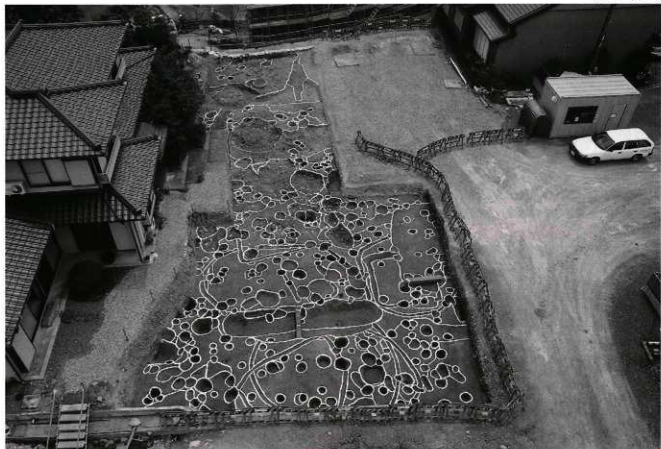
79 第101次発掘調査区SH48屋外「マ」(南から)



80 第101次発掘調査区SK69・70(北から)



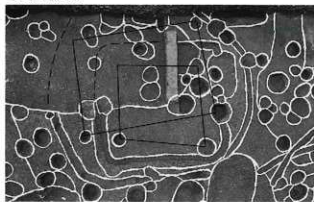
81 第101次発掘調査区SK69・70遺物出土状況(西から)



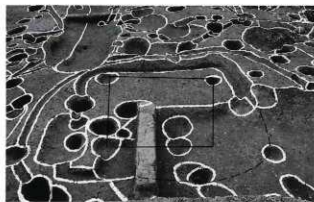
82 第102次発掘調査区全景(西から)



83 第102次発掘調査区全景(真上から)



84 第102次発掘調査区SB51・52(真上から)



85 第102次発掘調査区SB51・52(南から)



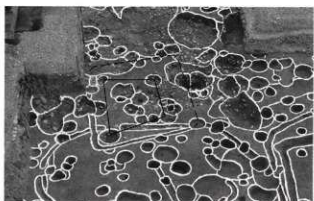
86 第102次発掘調査区SB51カマド検出状況(南から)



87 第102次発掘調査区SB51カマド(西から)



88 第102次発掘調査区SB53(南から)



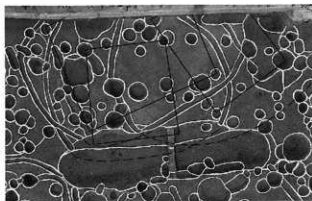
89 第102次発掘調査区SB53(西から)



90 第102次発掘調査区SB54(真上から)



91 第102次発掘調査区SB54(東から)



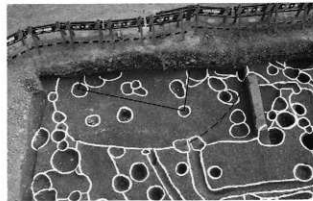
92 第102次発掘調査区SB55・56・57(東から)



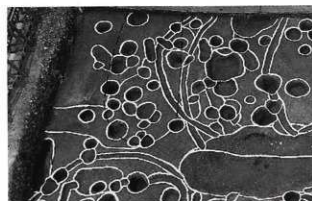
93 第102次発掘調査区SB55・56・57(南から)



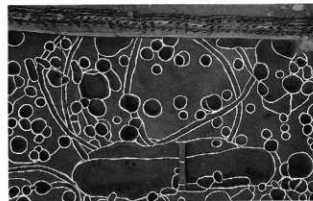
94 第102次発掘調査区SB61北側(真上から)



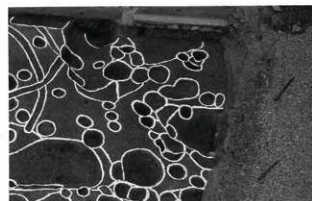
95 第102次発掘調査区SB61北側(北から)



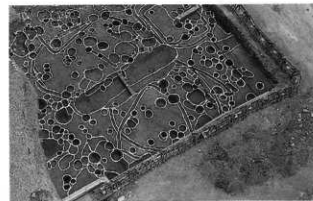
96 第102次発掘調査区SZ17(東から)



97 第102次発掘調査区SZ28(真上から)



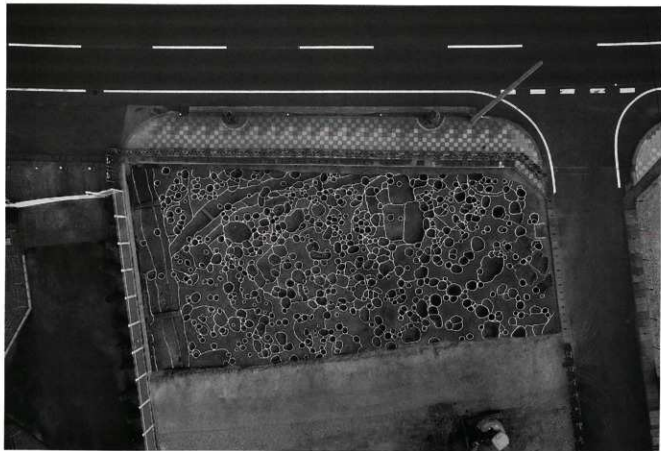
98 第102次発掘調査区SZ29(東から)



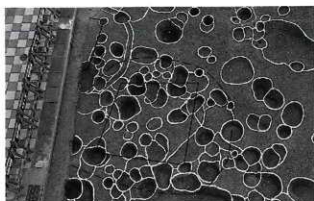
99 第102次発掘調査区SZ17・28・29(北西から)



100 第103次発掘調査区全景(南西から)



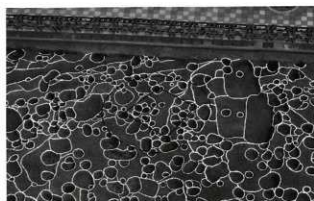
101 第103次発掘調査区全景(真上から)



102 第103次発掘調査区SB15・16(西から)



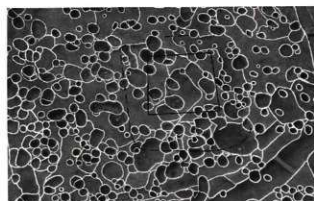
103 第103次発掘調査区SB15・16(東から)



104 第103次発掘調査区SB17・18(南から)



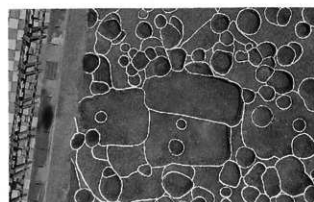
105 第103次発掘調査区SB17(南から)



106 第103次発掘調査区SB18(北から)



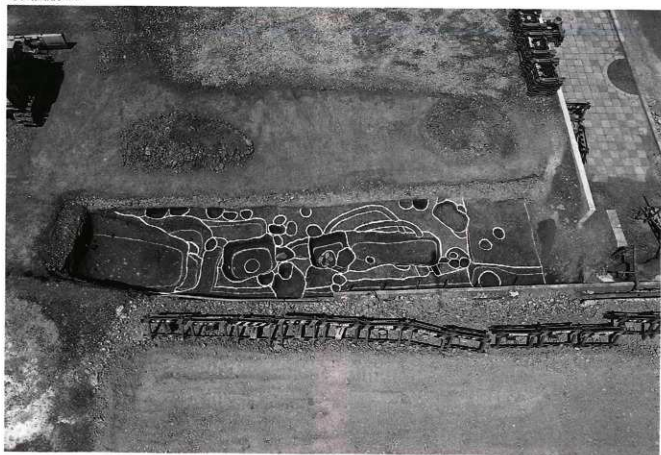
107 第103次発掘調査区SB18(南から)



108 第103次発掘調査区SK91・92・93(西から)



109 第103次発掘調査区SK91・92・93(南東から)



110 第104次発掘調査区全景(西から)



111 第104次発掘調査区全景(真上から)



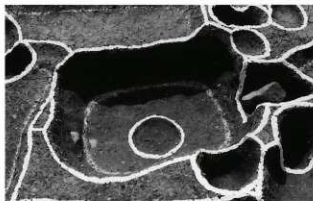
112 第104次発掘調査区SH49(東から)



113 第104次発掘調査区SH49柱穴No.1(東から)



114 第104次発掘調査区SH49柱穴No.2(西から)



115 第104次発掘調査区SH49柱穴No.3(東から)



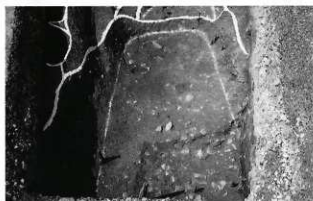
116 第104次発掘調査区SH49柱穴No.4(東から)



117 第104次発掘調査区SH49(南から)



118 第104次発掘調査区SZ28東周溝(東から)



119 第104次発掘調査区SX1(南から)



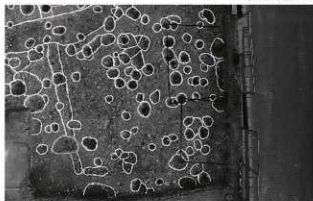
120 第105次発掘調査区全景(東から)



121 第105次発掘調査区全景(真上から)



122 第105次発掘調査区SH8・9(北から)



123 第105次発掘調査区SH8・9(真上から)



124 第105次発掘調査区遠景(北東から)



125 第106次発掘調査区遠景(北東から)



126 第106次発掘調査区全景(西から)



127 第106次発掘調査区全景（東から）



128 第106次発掘調査区全景（真上から）



129 第106次発掘調査区SB60(西から)



130 第106次発掘調査区SB60(南西から)



131 第106次発掘調査区SB58・59(真上から)



132 第106次発掘調査区SB58・59(南から)



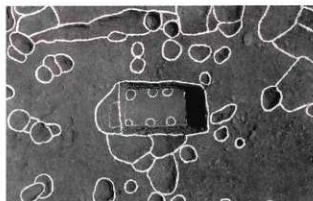
133 第106次発掘調査区SB24a・b(真上から)



134 第106次発掘調査区SZ29(南から)



135 第106次発掘調査区SX2(真上から)



136 第106次発掘調査区SX3(真上から)

報告書抄録

書名(ふりがな)	掛之上遺跡(かけのうえいせき)						
副書名	袋井駅前第二十地区画整理事業に伴う第95次～106次発掘調査報告書						
シリーズ名・番号	袋井市駅前第二十地区土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書41						
編著者名	水野雅彦						
編集機関	静岡県袋井市教育委員会 〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1 TEL.0538-23-9264						
発行機関	静岡県袋井市都市建設部都市計画課 静岡県袋井市教育委員会 〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1						
発行年月日	西暦 2015年 3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯・東経(°'")	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
かけのうえいせき 掛之上遺跡	静岡県 袋井市高尾	22216	151	95次: N 34° 44'40.708" E 137° 55'42.506" 96次: N 34° 44'40.570" E 137° 55'45.769" 97次: N 34° 44'40.100" E 137° 55'47.051" 98次: N 34° 44'38.310" E 137° 55'47.220" 99次: N 34° 44'40.369" E 137° 55'41.385" 100次: N 34° 44'36.265" E 137° 55'47.796" 101次: N 34° 44'40.282" E 137° 55'47.565" 102次: N 34° 44'40.590" E 137° 55'47.235" 103次: N 34° 44'40.794" E 137° 55'41.414" 104次: N 34° 44'40.458" E 137° 55'46.643" 105次: N 34° 44'39.820" E 137° 55'47.912" 106次: N 34° 44'40.913" E 137° 55'47.373"	95次(現地調査) 平成23年5月16日 ～平成23年6月29日 96次(現地調査) 平成23年5月16日 ～平成23年6月29日 97次(現地調査) 平成23年7月4日 ～平成23年10月5日 98次(現地調査) 平成23年8月1日 ～平成23年9月9日 99次(現地調査) 平成23年10月12日 ～平成23年11月18日 100次(現地調査) 平成23年11月21日 ～平成23年2月20日 101次(現地調査) 平成23年12月16日 ～平成24年1月24日 102次(現地調査) 平成24年4月19日 ～平成24年6月8日 103次(現地調査) 平成24年6月4日 ～平成24年9月6日 104次(現地調査) 平成24年6月29日 ～平成24年7月27日 105次(現地調査) 平成24年8月7日 ～平成24年10月26日 106次(現地調査) 平成25年6月10日 ～平成25年8月21日 資料整理 平成23年5月11日 ～平成26年3月21日	95次: 166.8m ² 96次: 94.5m ² 97次: 146.6m ² 98次: 293.6m ² 99次: 251.6m ² 100次: 387.0m ² 101次: 180.0m ² 102次: 253.1m ² 103次: 344.5m ² 104次: 81.9m ² 105次: 229.2m ² 106次: 515.0m ²	袋井駅前第二十地区画整理事業に伴う道路建設・宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
掛之上遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世・近世	竪穴式住跡、方形周溝墓、土坑、溝、土器(常陸土器)、須恵土器(土師器、須恵器) 土器(土師器、須恵器、灰釉陶器)、陶器、瓦 山家城・陶器、かわらけ、古銭、磁、宝篋印塔				

掛之上遺跡

袋井駅前第二土地区画整理事業に伴う
第95次～106次発掘調査報告書

発 行 平成26年3月24日

編集・発行 袋井市教育委員会

袋井市都市建設部都市計画課

印 刷 松本印刷株式会社

